湖月鈔

手ならひ

手習

細 巻名は網をとく君を手習ふ詞にあり
孟 手習ひする 身をなげし涙の河のはやき瀬にしがらみ
かけて誰かとゞめしとあるうたを手習ひしたまふ詞也
の中に四ケ所あり 細 薫廿六七歳の事より同廿八の
の始まで同卅かけり浮舟の失せしは翌日の年の事なる
く次の年の夏まで也小野にありし比の手習
の巻といふなり

そのころ 細 その比とは恵心の時
代をさす僧都は恵心か
僧都にかしこき人なれば河
海にみえたり 河(カツラキ)恵心
院源信ハ大和國葛城
郡ノ人父ハト部正親母ハ清
原氏道世ノ後隠二居ス横河
谷ニ仍テ号ス横河僧都ト上
畧記 愚傳委元亨夫
之書ニ

かくいふ人ありけり
細 源信僧都の母長谷の
観音の利生にて僧都
を生みたるなりありさ
れば初瀬にまうでたる
よせあるべし 愚案 此事
元亨ニ見えてかうり 又元
亨ノ釈書ニ曰ハ 詣高尾寺ニ
求子ヲ 母夢ニ僧与ニ一顆
玉乃娠ムコ云々
いとのちとさりけりまうり
たりん おのづから此河国
契るとの知人の家なるへし

そのころ横川になにがし僧都とかいひて
いとたふとき人すみけりやそぢあまり
の母(大尼こいもうと)五十ばかりのいもうとありけりふるき（細 源信のいもうと安養の尼と云ふ）
願ありてはつせにまうでたりけりむつま（細 僧都の弟子）
じうやんごとなくおもふ弟子のあざりをそへ（みくし母に具しうる）
て仏経くやうずることおこなひけり事ども（長谷寺へ詣果しに法事をかうし）
おほくしてかへる道にならざかといふ山こえける（お 奈良坂は大和也）
ほどより此はゝの尼君こゝちあしうし（三 僧都の母也）
ければかくてはいかでかのこりのみちをも
おはしつかんともてさはぎ
て宇治のわたりにしりたりける人の家
ありけるにとゞめてけふばかりやすめたてま

山ごもりのほいふかく　孟 三年籠られしかど母の煩ひなれば出給ふにや　河 此事 愚案 河ニハ恵心僧都妹の號等を付僧都山籠をするればよそは出ざりしとて或説安楽に参りて法華義疏とも云地蔵を念じて蘇生せりとむかしの古事談になりぬとぞ

みたけさうじ　花 金峯山精進也後夜に於庭前礼拝金峯山百度すとらに一段ふかき精進也　三 此家あるじもみたけさうじすべし此故に人死をも忌ハ穢をのけるなり

なほいたうわづらへバ横川にせうそこしたり。山ごもりのほいふかく。ことしハいでじと思ひけれど。限のさまなるおやのみちのそらにて。なくやならんとおどろきていそぎものし給へり。をしむべくもあらぬ人のさまを。みづからもでしの中にもげんあるして。かぢしさはぐを。家あるじききて。御たけさうじしけるを。いたうおい給へる人の。おもくなやみ給ふはいかゞと。うしろめたげに思ひていひければ。さもいふべき事ぞ。いとほしう思ひて。いとせばくむつかしうもあれバ。やうやうゐて奉るべきに。中神ふたがりて。れいすみ給ふ

うぢの院　細 平等院也朱雀院の御領也とあれど別の所也但宇多院の御門御遊覧の所にあれば是そうやうに出るなり　河 花 李部王記ニ天慶八年十月十八日朱雀院帝宇多法皇牧勘文ニ云宇治院萱原法皇留後院ニあるとあり　今案 朱雀院を寛平法皇と申也それを此物語の朱雀院にとりなして読む　師 此宇治の院を僧都の知人也

宿もりの事なり　孟 宇治院の留主の人にて物まうでしておはしまさぬゆゑに留守をするなへし　花 物まうでの人ハつねにぞおつねまうでの人ハ宿もりをさし

かたハいむべかりければ。故朱雀院の御領にて。宇治の院といひし所。このわたりならんと思ひ出て。院守。僧都しり給へりければ。一二日やどらんといひにやり給へりければ。はつせになん。きのふみなまうでにけるとて。いとあやしき宿守のおきなをよびてゐてきたり。おはしまさバはや。いたづらなる院の寝殿にこそ侍るめれ。物まうでの人ハつねにぞやどり給ふといへバ。いとよかなり。おほやけ所なれど。人もなく心やすきをとて。見せにやり給ふ。この翁れいもかくやどる人を見ならひ

どうぞかなう事ならひ。
みとして 細 清浄を
つらへて僧都のうち
へ住んよろうち 罷同
孟 やとりの所なく
抱のおふきそうこ 私人の
くしろやうるうし

さりながれバ、どれそうろうあるもろしひあぐしく
ようらし先僧都(そうづ)もうらけう給、いとしいうくあれ
て此そろしげある所ゐるよしこおそて、人とこ
ら経しめるとの給こ、のうちとよそひ 細 ら尼ま承うり
法師とも青子と二人にしもしおうらし、此すかやうけう海
ひとりおすほどしのあうようつき、くし紀 細点
経の下(げ)らう法師よ火と、こさそよ人
とよぬうしろのうよいこそうつかう
とこある木のはしとしもしけのこくう 浮身の袖よそれてみかるくし
やとを入ろうよおろうさりのくひろうさ
おぞこあうれハ何ぞしこととまりて火
とあくみしてされバ、りのくゐさうさてうさ

しらのはあしく
細 法師されども、くいそう、
身の毛さらさうし俗人(ぞくじん)
の髪おろし人今すらでもし
どうろうさ海と極楽
み下されしさ抱の衣よ
御輿のうちびしのうら
ゆるさこうじうろうでもうこ
とよ、しらの毛ろうど
人のいふさうにそう
ごとるもとしらく 中略
孟 髪がおろへ立おかれん
とし、ふくらめべさもし身
の毛ざらへらし

うろうごろ心の変化(へんげ)しくらう。ふらうしこおう
いさんとそ、ひとりはいますうあるとよ
みいまひとら、かるよう、れよう、ろぬりの 孟 一人えさ用よをうくとけしい 細 退へき所を借く
たすんとをひてさやうのれしぞくべうさ
みんつらつてさすずうよる依りさ、うしら 孟 下とひそうをつうろとうて
のうこおう、バふらりめぐさらもうりにこ わざりの心し
の少人とりしうんだくこしそうううあすくあ
ふるさと海しそてらかくらりて、その海 お奥るさく思る所あかくかとうろうし
とされべうとはるすくつやくうして大かう おかき
木の根(ね)ていしおうくしさまよりみそ
いうじうあくめうしさこしするさくる 大法の類し
又僧都の法場(ごだう)よ住しんきさせなまうげや

ある人の人は　花ム通乃
中よ神境通とらでう
ありまに妖通報通神
通あど差別あり狐
よあきよあどの人会家
もうとまご妖通とえりと
歟よそあうが希有よ
人よ妖怪なるハ妖怪るろ
通とらてく又報ふどの
雲よのりて空をとる
とぞ報通とい云也
の因縁よよりて報と
もうしむらる報をお
できよらりて果報乃
通とて聲聞菩薩
佛るどの通とし非通
とらふ是ハ今世の修行
よらりて得く志うと
神変不思議ある通
其中に二宗の通ハ神通
よ及ばど報の通ハ仏
よ及ぬ道理あるべき
何ニ后後よ狐の人の書
まだけらしある文集

とい人だにけよおやおうさことるすりとしてひと
なハまうでくらうことなんとのもてぞある
の人よ変化とろとハ昔よりことにどぞ
と狐ぬ物すらりとてけどし
尼玉並のこ　おりて　孟尼岳の
まうり給ふんとすりしらよよりて　下もぞ
まゐらんとて前行の毎年をする
どもこえれたうくしき　いうけし一所なりども
あうべりしきこしぞとどうううまうりよ
とるイ　食物のまうけを人くきれハ他の人ハゆうす四五人くるとく
はいくのるすりされバ　ねまうりまどて
しうるよくて四五人しててうたろ物と
紋木の下よりてえ物をえ
ろろようえろことりなし。おやしうて時
悦彩のなと
芸らうきくこうとく夜もあけきてえん
人あすよぞしこおしハさんとらよるべ

古塚狐るどの引
みつし　所　孟　御一厨子所くし
細尼玉のようけもうく
とらし所ハ食物と潤もろ
所く
これハ人なり　三　玉言下
あうしふもおらぬ女人よ
人いこ春るえ

この流のうちよ　孟　此説へ
死人をつれてハあうる後
しどきてく
こうちよ　何樹神　木神
魑魅　魍魎　空谷響
あづしそうて
何ト　欺嘲　哭のこと　和名
又詐　師ゞろうしふし
うとくし
けぶひわるくこ不　孟　釋よ

ろ
細変
おほ非
よろ人　孟
何筒子所くし食物と潤すり所くし言れしうもに移りろうり　花
ころ玉云と　しきし　穴下とつくらりてらうるにも
化の物よおくをとり人言をいう
うくやがりつんにられとしたらうるよひ
悦彩の調之
常世
ざうの名しうぬりのよあらしもどいうりて
よ人おすくなりうさうの人よ後おのらぬよらこそあ
めれめしるきよえらかろ人をきぞくうりろ
かよをぐうりきうとしくいふあすまの人のを
法師ときの調之
うこの流のうらよもそて侍しんさらひま
ことれ人るうしもさうな　にこ玉やうのりのて
あざむきそてしりそてこうて人をそて侍
らあいと　めびんあもものうれけぐうて
あるべきあなまことそ　待めれとしひてあり

すもんといふく師弟八
死人ゟもたゝかん
ぞあらかく
ひさしぶりあけて
細うとあそわけらく
三 ひさひさしあらハ志
そのうらし

つる宿かりのおのことらが山彦のこゑから
細やどくりく
といしおそろしおやしのさ海よひさいと
法師の詞と
しあげて出たらり。宿よいはらこ女ちじや
孟宿吉
ごくぜんし
もと孫なりこしまんあうとてさすれバきつ
ねのつゝものかり。この木のりうよおまん。
ばじあやしきけざるんし作ら。ねらくしの
杖もろくよ作る人のよのかんげだらうよ
作しをもりてまつてころしうしうども。
法師詞
こわざろもで作り。さてそのちごんとまや
者ゐるの詞
たかしとらんバいそそ作りき。猿いさこそ
ひ人をとびやりをどこしよことあしぬや门
とりみさ海いしもれなりの衆かくさま

さして寺ちがおやし海
ぬさ海ららいらのくひ柚ま
いしせんとするまあある
しやとく

このこのりんさの
孟僧都を路志とく
お 天下第一の路君とく

こ海のどかや
花大木の下よ身ちあれ
ま木玉の鬼ともふけさ
すし
めとしそるもろきめまよ
細目なし鬼のすゑをひる
すと 河 文殊楼の目無鬼
事文舊記よ目鬼と
見きく衆来の盤といふ
法物絵よも文殊楼の

すりのく所よんをしきらなりべし僧都
さしバきやうのりのくもつらけごふ我よく
とよりてこのりれをうちをぬ法師をよせ
孟法師詞
されバ鬼か神かきるなりこ玉かぐらうの
あめ
天の下のりんされおかりしゆすかせえくれ
まうじあうりまゝくとさぬをとらて
浮舟の詞と
ひげバ目をひきいれくいよくるくい
法師詞
であるされの木玉ひをまわや。まさにつ
くれるんやといひつ目をきらんとまう
よ。驚きらんめとされまるうれろ。め
とうやかんとせてつけさ鐘のり
うへきさ海を人はこそんとふてさねと

同あり鬼のやうなる山法師なるによりて此ねさくなりとも、くなるなり
いかさまの 細いかくしきこと花園のけさこんしまし 孟 威攬(かく) 辛(しんき) 三 盛辨之
いさとひを見るべし

ゐいらくかりぬべし
細 此句則済みの人の
の聖日し

池よとりぐりを山よも
くまりどぶるは
孟 まして人をやとし

ひさしからずしてこれにも川いでてこゝさ
一たりたすくなりまれりくあやしきこ
しとすべきぬ世よあらじとそこそむと
そよ歌いらくかりぬべし。されてもいふぞ。
ちよかそてくづりぬべしからこのりしよそこそぞ
さあとしいふ俗説まうしの人のこちらたり。
そのいのちこえぬを。うらくもそんしては
いきしきくところ池よをとりぐりを山よも
く康をふよ人のりそしくられてもるんと
もわとそへつてまずけぞ人はつてのしろ
べし。人の命久しからむことおもふれどものど

人よをくれ 細 普門品よ
或(アルヒ)被(ハ)悪人(ノ)逐(ヲ)とそう
墜(ツイ)(スル)もに 堕も摸死し業師経
よ九つの横死あり
人よそらりうられて
孟 人よさぞらられさらん
く師人よそぞうらこ
しせられてとし

其命はちねべくはつよき
まよおもいど
三 自業自得果の理
るれども
この大ともしして
おおよ抱おちせぬと
せる人なりくし

まこの命一一日ともおしまざはあるべからし
ぞ。鬼(きよ)みも神(かみ)みをつかひとされ人よわか
られ人よそうちでられてもこられたきこさ
海のたつよまそへき抱まつそあれ。仏の
るうびもくひすへきくはうり。往仏こに
あぐらしゆきの世をすぐしてきけん人
んつわよちぬべくいりちまうるよあらば
とのまでこの大きうしていまさいれさせ
多伐でしとをいくしきりざうれいそう
孟 退きし寄と牙 三 俗説の姫の事
まづらひ俗人の世あくりよようしね物と
ならいれとくけうしひとるし。べ出きさん
又一人の世すその句し
とすと。めくとあら文抱害化みもあれぬ。

れて侍りせしおくりま
細 尼君らうの事り
うつし。孟 尼君又ゑまで
ハいかゞ宗活ほまうる
てき給ひて

花ころくく
よころすくいけり人とうり毋よそうし
うそしきんハいとうじきしとられへのすぐるで
よいふ下とみどいふとさハりしく抱とうき
ていひろすはちれば人さはがしうぬり
くれのうさよるんみをさうりかけくり給
しをてわうね給間どいひうくつしうりう給こ
てのくきうらてそうしきけまりて僧都きつり
人ハいうがおわりぬうらんひまふなふくぞし
法師詞
のゝといそずいさりし給しぞなすまう抱よ
いどられよかう人よこをとふとぞいかう
との尼君はて何ぞすそよあまりくやして
孟 僧都詞
よらん六十よわゃうりとし。めうりしうるり宿

よのが寺まそてそんしゆめ
おうさ
細 寺とハ泊瀬なり
孟 いもうとの尼君の詞
そらをよこりりて奥
蔵とをうしも

らん秋意うすむせてまめ
孟 僧都のいまとハ大恵
鏡しらふ人の妻ゆく
あらしがむもあ
しるひて紙しこの姫よ
なんどうして尼まるわ
りうしうをむしとめ
そ中将といふ人の妻そ

細 いもうとの尼君也
よきまへつりよの絡ぞらうてすくよ。との
寺みつくらし蔵あうまいふやうたらう人ぞ。
まつそのさ(あ)らんとるすきての給。そこの
僧都の詞
ひゞのやうさゞよろん何かとやはらんぜ
妹の尼君へ詞
うくいへいふさりてころま人とう
つぞそもそいさきうりゐいしわりるろ
法身し
くしけるみ母のおろきおやのきねーかさね。
氣色の
紀のうろあそうらりハいうじうるそ
香し
しるておゆわりけらひうぎうるすぞ
秋恵うすむせてめのうりかりしまう
すありとそ。なくこごうらをいふして。
いふされさ次。いふるなうろうんとあり

おりおりとうや花
いまゝつらんとまおり
ま後らぬ人　細動てころ
付うつ人と鬼や何ぞ
いとゝくとちらうと今
せとみ定てのちぞそえ
じめの後ともまつぬ
女房達八坊をうつくも
ころぐいざさ入らうく

神子の法ゝめよ
細く絶と神ならく
如何の前よ続を以
て
うつうじてとくと
てうの母をいうせよ
とし
まどろまうけびしひよ
盃とても死あんだし
よ・此分の様よこうら
ん。こゑうて
まうていきうすりそ
を いゝるろ人そと臨帰
之 師よき人みとまそ
り 弱びきそじつし
きまつかんとと

ま後らぬ人ハ地そろうふぞでふさきこれ
つい（浮舟の事と）ろやうふとめしぞさすうよめをと
かのうよこあげうろよ。（尼君の句と）りのくまへや。いうろう
人ゝかくてハりのしまへるとゆへど。（浮舟と）袖ぬれて
ぬま後るう。（尼君のと）湯とりてまづうしとくひ
へあどすうよふて（浮舟と）うちよそし入やう
あうくれバ（尼君の心と）中くいうどさつざうれとそ。
この人母すくわぬへじうらしまへとげんざあ
わざうよ（血法師との句と）いふされバこそおやまつき法袖あろ
ふあうといふど神なるの法よ誦よ
とつといのう傍船をさしのぞきて（調伏しそし）（傍船の句）いうかざ
うすいの志つもさぞしらくてしていへど
の結へど。（浮舟のと）いとはげまさしうそゆくやう
すれバ（法師方の句と）えのつき待しじもぞろめけげうひよ
こすりてまづうふづきこしさゑずうよいそ
やんごとなき人よこそ待めれまづよふ何を
とらでよやいもそてさまう結らんそとくう記
まぎうるとしいひあつう。（細傍船の事と）あれゝ細人よ（師妹の尼君の）まきうそ
（約あろへし）なまづくりしきてとめぞのかなきどくらう
ふあつて尼君いおやのまつうひ結あうとし
ひ人をいけそそくこゝまかまつかしうそうら
つけまそひぬしうまつしぬ人すれどもとめ
のこまうかうしかれバいづつまうよと
と。ころ限あつうひさげさろ。さえずうかよ

おやくかやしなしうる
しもふ人の
死妹の尼のわりしむを
めのかりうよえんと云
うなすり
きくあうるすをやむりん
三 浮舟の事むうくう
八宮ありの事こらんと也

人のむまどいさんとそ
きくうりくらの枕うりや
は鵜色遂人代甚起
三色遂入進覧
古塚 細 うりのりのと八
狐の枕うとく
二日ぞくりこりりあそ
孟 宇治院よとまて
よう二日ぞくうるや
故八宮のれむまあ
三 浮舟のるるとろる
なり

はじめにおけるにしつ、海のつらをはすと思
孟 月を見よしえ見用之花
るかうくと、あるらうやいつくじうるすと
よ人のそうりよれのそらひさまえるれ
尼君詞
云事ゆるとうひるすくたより浮むら、わりくる
ぶいしをやゆりうん、さうへう夢見てこそ
お世の縁あうくこそうよ見付
ら為ともり
くえなすらめ、みすといさく枕の浮へるひ
づられどうらうしていさ
細 自分の事の詞之
やえきさみようの人なり、人よままでわ
孟 不用 師 つまそをようあいとえ
この河よゆらしつれまでいつさのまへ
孟 尼君詞之
よりふきれくもの浮をうれしとそふす
あるつうじや、いかうれがうくの浮ぞ、いふし
浮舟也
てさら病ゆほゆらしつうぞしむへども、枕も
いろんぬぬ身よりしきずるなどやあらん
とてこれどこてくくさ一所るすくうれ
うしくれば、おさまし〳〵くるすく海つとまへ
のむゆするさんとそ、如きさうらの枕や
細 母の尼君
とうるふ二日ぞくうりあそ、あそうり
と此母よきとく
の人をおまうぢすうて家さしむぞ、おやえ
きこしとやさらで、きえりうりの下をむぞ
細 宇治之
の僧都はつくまうろうくておいとま
をうりとそとかつひいそくうともりのかる
下その日
つまなどしていふをきけば、故八宮の御女
古大将殿のうしひ浮しうごさるるかやと
薫之
浮こともえずくてはいうまうくれまつりて

御さうぞう　細 浮舟の
葬送之　孟 浮舟を送
りし夜のことゝきこえたまふ
てありし日比秋さうさう
きしそのゆへ首尾之
昨
さやうの人の宿直ねど
三 此人〻とハ家の法師を
め浮舟の葬送のまぎれなや
とおもひよそへし
まかりやられし　細 車を
やりてけしきがらせし
ことなれどそこくし
くもみてざるへし
孟 葬送の火けぶりなるきえぬ
きぬるまでを見る
れハにや　昨

てまはすぞ侍る。その御さうぞうれ雑々(ざうざう)のもの
つかうまつり侍るとて。昨日(きのふ)のえまゐり侍
らざりきといふ。さやう(侍従ん)の人乃宿直ねど。
殿(とま)のとのゐにまかりて。さゝやかなる。師(かく)
まかりく(見かくし)やうくありのもとを。ゆかりなれども。はやうく
ゆかりしとゆかりそ。人(日の人の御之)〻じんやられし火
はおほかたくしるしをとゞめざらし
とといふことにそゝぎていひしは
も侍らざりしといふ。けしき(孟 さてハ葬送)ひさしくそ。
立(細 大夫のことく)みたるをば見おどろかれしのれむ
そめかりおかくしいてをあて。葬送はさり
ゆかりの物(浮舟のことハ人にもしらるゝまれて)。されどもゆゆしきことなれ。姫(細 女二の宮などにえ)たちおと

おほかまる　孟 尼云本復中神を
あかし　三 侍従の母之
つぎのよハ　次の車之
孟 いりうたの尼の車に
浮舟とのせさうらいまひ
よりハ尼君のやうなる
師 女房ともや
とのといふ示しそ
何小野の内大衆村之
布施といふ物なるか

さなりのそでよるよしくいゆかりむさしといふ。
あまぎみ(大尼し)・しんしくかくおもき方(三 天一の方のあさ)もあきさね
れば(かたいりり)かくてそかゝる所に。又さやうのひとを
もどんなしとそくるこの人(御浮舟之)〻かれのとふ
ちげあらみちのかどをいひでむ露
れんいとくなくすぐしさくとくいひおつり車ふ
さりして。おい(侍従の母之)〻人のうまかるわたほつゝまか
まかわたりつぎのかは此人〻(三 浮舟之)をかるそて。
さこうよりとのひきのぞきひて後もこう
らもじをやうとぞ(はき)車とめてゆゝかくかなど
しけひえざりてよ。昨(細 大夫之)といふ不審なきそで
も給ける。そとよかりつゝ明どいとさと。

東にかけるく 細常陸殿なる
れども、なれて遥なるの所
あるべし

り給らん人りや 孟人の
給ふてとらひしてはと
尼君のなし 抄菱浮舟の

中やどりとぞまづなくべかりけるなどいひ
て、東にかけておかしつさぬ。常陸は、おやとあ
つかひむすめのあまたにこのおほくぬ人と
なんぞさそれはでうきこかろうしてやむ。
おいの病なりけるどもしるすきかづらしとのあなる
へしとせんののちまゐりつこそおほぢしつらう
ひ給ひかれやうくしきまうらかりたまよ
かれど、常陸はのおもはまぬかう人なさん
さかるなど、清しのあとらかなはずうしね
ともかれぞぎらしく人なはまめづと、尼
君ともかしらぎさめきをつけしゆくう
人すやめかしとさかはんなすしいひやそすら

いそぎまち給中人のもとむ
あそびは 抄宇治のあさ
つまよろい人はあなじお
成りでの人は宇治縁ま
よ所りてまづくる物
まちと浮舟なと推をき
きりとし

河よあるりてうもひし
孟浮舟の宇治その一
言し 抄浮舟のいまさん
がつたちさき的し

ぬ中が人のもとむあくかりはらう人かをあが
途ぞん、抛きうでゐるどきつらきう人のこ
しらるとよぶくひきん。とままい母きどや
うの人乃さうりてしどうもさうりやる
ようぞさうけり。河よみかしてしもひ
一言しりかり。抛をさしくるの給ひぬべ
いとものづかすくさくいつしか人ならす
しくこうんとさかよづつくとして物さあ
ざうまりすく、いとあやしうのとりの
まへいづるよいくまがしき人やと物りひ
みづからすそうんといひとおもしうかう
葵ぐくりし出くぞ、めかりいのとを

からやくこと　細 薩摩
之郡名にハ茶多やと讀
摩の壇よ燒之所讀
土产ニハ西米穀茶子など
燒之郡名にならぬ
よし云

あかしきる　細 傍初をいへ
るごてまぞしとハ此仮名
とかしき之孟尼公の傍初
を我弘らし山龍里乃
ちうひあらとも家へ出
あらんこそあらめ仮
なやまぞハ何かうらしう
るべきうらし花
くまぞもありけらんのい

しあぐりみも思びやうまなしやくこと（細 声）
ちうせのみ折ちんくあかのはどもまよ（まよむ之ふ月さ月し）
み月をとるぬいしまびしうひなすこし
とおびて傍初のゆりてよるとあり給（いうとの尼の傍初）
てごの人さみすけあへさみすらなふあるで（へらひやう文詞し）
とあるいまぬまじらきろ人とつきし
つるやうじさうりのてさうぬまへそあめ
れおが顔をけ家よいぞ給づこそいあ
らあらてまぞしあへるなどいうじ紀（紀とし之）
ころとうきてづけくなれまへれバいとあ（傍初の詞之）
やしきこしられつくまでともありる人
の令などやがくくらきくまじらバう

白きうろしおかしく
めへるさまさるるやし
とつめくうし文法之
ごらうつきにかりしとらん
何令葉盡　經文孟傍
の泪こうつきしうで
そ凡よ及びぞ出まび
いのらんとく
ゆうしきるすとのつう
おか抱ひさき不淨なる
氣のるすきとく

いとるさくきりくいのはるめいるる所　遠近ハ

きちぶりあそてこそハ我志もいかくめ
うろきよふすけろそんしぞれまで海
らとはごうつきよかりとせらんとく
ありなかりまろびかりて月ぞろ風（尼君の言之）
さ海をしてろうくへしくふみんへいひ
つりきことぞのかしあるへさをいう
りゆきろへをいとさまげよめぢけう
ホあくの抱し給ぞそうぞうととしるり
ちうとうくていさうわざるがかくなし（細 令ほし之）
ゆ君なくかくくのまへがらかりしかめ（孟 傍初詞之）
づうかなる人のはありさ海られいぞとそさ
しのぞきそまでげよりとふやうぢ

めでたき御ことゝいふべし
めいしにかなへたるかひこと
いふ 細 容面兒戒行の
相をよくしるすなり
五容面と云之戒行の体
を人ハ善人ハよせうる之明
直上人の善人ハ人参と
のまゝにと
みとうの山にひたすらに 河 端正
若忍辱中来 集経 花面端
悲端厳為人所喜見
法華随喜功徳品
なをまうされ 細 仏も経を
きこえしハあらん経まで
ことし 花厳経云佛
説法縁起云々 ことに人ハ
業本等の経の念仏あらはる
の縁をとりて生養せり
ことく経あれども論なり
まで沢物せられ菩薩
慈悲海しますとみども
それ人の命因むけまだ
むかしよりひきうみ給ひし

なりける人のはゞかりもおもひいでゝ経よめ。（容ハ面也）
といひまことぞかなりもおもひぞ経よめ。
いうたうきびめしてくどくこゝろまされ経を
んぜしへやまひあしくともこゝろのはるけき（細 おもひしりけるのおもかげ）（三 後より見るまゝのおもかげ）
やまひ経。きゝるはこうしの後しにおよ（細 尼の御こと）
かはらの鉄苔のまつるひとなりとの経
へはすよりそれえんよりさびてそのゝびき（後の御こと）
経らめど心みさことはいぞうれどのまひ
あやしげりまてずかうじめくらむ御や（三 之経也）
けのめしよぞうしさうなかくこなり（無せぬ法師なる）
ようしを出まてもゝろよりひとのさあ
まうんところひさつぎ経とりのしをしの

紛るゝも小町の尼なり
やしまうつるべき因あるよ
しりて浮舟の君とみち
びきまつる経上縁と出給
あてゝよる心中略
むざんの法しにしてらむす
の中よりうかハみかゝく
めども 細 戒法の中に候ふ
事多くれどもしゆ云
懺之早下の御こと花厳
識論曰云何無慚不
顧自法軽拒賢善
為性能障礙慚生長
悪行為業 諸戒
の中に廉強罪ハとのづ
うち出ゆしくも細過罪
ハ急より止くきこれし五
戒 八戒 十戒 なる八廉強
之二百五十戒五百頭戒菩
薩三聚戒十無尽戒二
切威儀戒ハ細過なるべ
この経法のかどよきもらへ
えんどいとつきしれてこそを

らんびてこゝろめぐくうべしと物がしてしど
りしひて人はころもしとうくを後報い（無慚）
であるまゝ人とせられむざんの法
しよそいむしのりのおもやかる戒ハ出家
らあど女のすらよつけてそこそ云り（五戒の中よ女の在るけがれてきハわうぞく後報の道）
とゝぞをあやまかりこともしとひ五千
よあまりて今之よ人のりごさとおうんハさ（細 今ハまつひるを云るる 不若とし）
るべらまこそハあるめしとのあへハよう（三 それも尼なりぞよし）（細 東で君）
ぬ人のまのよびんかてひそり時よ
は仏法のきずとなりをりこしるらそ心
よのうれぞくりみこれ後法の経よある
そのことぞいとしいかしきことれをらひまて。

十三
十四

細 行者の行をおこなふに
ハ平生の修錬のわざを
此時のれいにかけて行ふ
なり

青きところをひせしかし
細 紺青鬼(コンジヤウキ)のことをいへ
ば 或記云昔深盛の
后に悩しの付金峯山
より久修練行の行者ま
いりてか持しけり 平愈
のゝち本山にかへりて年来
の行業を廻向して誓言て
鬼となり紺青鬼と

夜ひとよおらじしまゐる月日に人々にまうら
かつて行やうの地にくへとまどひてさう
ぞと あけさ給ふらひたるを思ひしこそ
まるのあざらうらかくよらぢし給月でふ
いかさうものゝれざるつゝあくけてう
きられつとのれハつまでまうてこえく
くてうきられそまうへき男すも かう
ど者ハところうひをし法しのまへくるゝ
世まうくし給ふくつてよひありこさ
しめさまさ女のあまさすこし給ひしまふ
をそつさそうかへいうるひてまこの人
はうわし世ともしこまてまれいつそしさるん

なりしを智證大師 [illegible]
なかりし故の事にはなく
この記にも見えしより
拵事紀僧正深敏皇后を
なやませしに無動寺の相
應和尚加持して結縛し給
ふなどあり
飲書と云ふことを
お 御様の飲書ハ大概
とあり

つまりは人々のつらさ
細 浮舟の上なさ 孟
孟よりまさしのようにて
物をいふたと
らうしこのつらさハ
細 浮舟也 孟 浮舟の本
性は出て見せたれども一
人も見てつまらぬ人も
あられどもかなしき
ようともなし

とかことを しらうひうの給しよつらうを
そていとふつうさ夜ひとうものゝ給しを
まうてしたうされど 飲書どう給うさ
海まそぐつを給ふれバこの修験をまげ
まそまうりぬ 今ハまうりうんとのくるう
くいふいるまぞしとへいづこうひとまの
こうすさけめや ころびしくもいらん
まうじとのうらハさはやうていさうまの
あがしてこまうそれバひとらうしひとのゝ
かいらて これ老法しゆくこ地うへ申う
物のこ思ひれバあつらぬら今てこまれうこ

すなはち人あれといひし人
とぞよ　宇治といふ事
を紙身ともいへるを
あり華幢ばせん有りまへる
國をば忘處さら事也

ならしていとあれしまし世のことしいはゞ
まですさまじくあれといひしへどそよ。
うちまはりぐしくうちをめかしとぞさい銭へ
ぐるしくそれをなげしへぞうしいづくよ
さまれるよりしとめくさいり川を八けしい 孟浄丹乃
世ならし川のすといひ出し
ちじとりのをなるけざてしられ人のあさ
つらしまつま戸人どまるてあさらうしに風
もげきる川波もあらう出しもひとつ
網代をそうらしりばさりこめきたれ
わがそのこのつしよあしとさし世な
ごうつへさるもまだうれてくうつん
しなりそうしてごうろうつくしこの世まうと

いとさけるせとこの
うちそて
孟男の人よ救してえ
るよ句とえし花

かんとおもてらしきやとがきしうそ人よ
えうけりんよりは影りすよもらひて
しるひてをとひつゞつくゞおもら
しとびしさしけみる男のしらさてびさすへ
そのかりくへらひていづくうらのをしを　細白文と申ひし
文とさしし人の志緒とおもし何どよ
てらうまじひよけうのりおもしねとこ
ろよもへまこそしこの中ゝはこうしをねし　細入あるし
もし銭つゞおよう〳〵侭いのこともをずろう
かうしとおうざうしうらす〳〵とて絵よそ
のらのこはさてていふもくおもしみとひ
よのいふをさけびおもくの日比りへまうつ。　細六月の比ちうかし

菊つりの中をさる
五 おい湯もまいりたる
ご心のつまそれりとえ
二 法弟の幸くよろうて
つく合ゆすども男ひを
とし
うらりへわつと立くし立
るるすいよろひて
五 執念さめてあり
三 奴ひのよこハらくや苗
うく

いまうさき海とあゝぬ人よあらされこ
つきんとうつしうつろようくていきらり
わうしと中すへもくらかしされバいきじう
出家してなうくしつとまる日ざかに何
しごろまうさき海しそてものいきりま
つうしまるさつら我家ぐうらの中我ぐるよ（お尼公の詞く）
まうしきといゝすればいくつりげよすくろ
こひ女をすうぞくらへめうとなどし
うまへるこゝはさあまでさはやうまこし
まへバされしうむてさと申すとうすくさ（お尼君の詞く）
あもかりうすくそひおてあうひ中のし給（ふ寄く）
わうへくべくしかしくれなき海しくらうか

いとまうねくて　お法弟
の死さく父どもちらざま
しているうち命うされバ
れ多しとと

つくらうもあるくさ
お中らの稲もあり

あいらりを　三 受戒尼
まみきとらしかりし
人りしくうけまでし
師匠さまとなうね尤とと
お法弟の尼まうす中ぞ
かるうをなりとみしとえ

これバころよつくしてぞかしく海りり
せうかはるきをいくぐくまうすんとぞとと（は法弟の名で）
うりまへどさうりそていきと海りさる
人の命うれバやとまうねくてやうくし
らりまうげさまへバりのまつりるうし給よ
ぞまうくゆりやさうりてもうしくされ（中き 尼君の名と）
しうちょゆるよおもよるしまてよさその（法弟の詞と）
さうんいくやうりわくべきとのまへへいとかし（尼君の名）
げるうけさ海をいうそでうさはるしきそまろ
らんとそでいさきうらさきざあうへぐ（五 出家させごろし）
うりをうけさせてそまろうろうりとみけ
までどりとまう中れくまさ人のらそえ（細 法弟の名やりくるうつて）

蓑のやうなる人ぞ又考るに
拾遺集の歌に尼君の許に
めしたまひけるふすまを師輔
かけてかへし蓑の笠を
かりけりや

ひとゝせとゝぬ　細老なる
人しらず手水ゞそてう
とし月かくりとせに
てゝせとゝぬゝし——
天人の　細此段悉皆引
れの翁のゝや姫を
むかへ時のふうそへ
たり
あやしきかんらまれと
せうひてかとあやうかね
さおり

まちくよきやうよ本の
おゞりとすましく皆の
のき色なるべし

孟云あそ此段はかぐや姫のもの
さかえてかうくりの翁かず。我翁は今ハ
ぢりもしくにさるりやめくさてまつりまく
とつひとさそて。のかりまぬ。蓑のやうなる
人をうすりくれと。尼君へしらてびひくせ
めそおろしもえつてほゞしもつてまゐり
給さびりわさましうひきゆひゝしうち
やりつれど。いつそよそれど。ときさこうく
これいつやくしけうらなり。一年とて
ぬつくりくさかりりて所かくゞうをあやま
いそぎさ天人のあまくゝれうとこうん
やうまさふも。おやうしきゝちまれどおど
うひとかうしくゞりりゝしくじくしくお中又ゆうは
はかとへぞくひとくあへいづくましうれ
ゆかしく人のさる所ゆかくいそぎかりきしぞとと
とめくとさてを。いとくづしとそくおや
しうらし行よこゝれきそうりやおうん。お
つきりんと後るとしも又よ芝て待しず。な
給ひのうよさびいづかゝとしてへ。さでつそ此世
よあらじとゆつぐ文書つとよりつらりて
あらめし行よ。まん人らるく此分さらゝ来乃ゑ
しまさより人の出きそて。おそていくらちるん
をしぞれよう所のことハ我身りく雅らもえ
と出られ行しもてといてらくとげよひ
るしくゞ世の中まるまでありけりとぞ。今

かくや姫をみつけたりけん竹とりのおきな
細 かくや姫の物語の心也 竹取の竹の中より見つけ 孟 竹取翁かくや姫をえてよろこびし心 家の内光みちて八月十五夜天上の迎にのぼりしことかくやと尼君のこゝろ也

されどつらき人もあらばやいてつかう
しそしてこの御あつかひをかうしと
思ひしられば見えずかくや姫をみつけた
りけん竹とりのおきなよりもめづらしき心
ちするにいかなるもののひまにきえうせんとすら
んとしづ心なくぞ思しける 細 此
のあるじもあてなる人なりけり むすめの 尼の母也
尼の後室也 妹の尼の事也
君は上達部の北の方にてありけるがその
人なくなり給ひてのちむすめたゞひとりを 孟 尼ハ前の中将ノ母
いみじくかしづきてよき君達をむこにして 細 尼君のむすめ一中将ノ北方也
思ひあつかひけるをそのむすめの君の

世とゝもに恋わたる人のかた
三 ひとりのむすめの君
修身とみゆるよし

孟 尼君のむすめ
なくなりにければ心うしいみじと思ひいりて
かたちをもかへかゝる山里にはすみはじめたるな
りけり世とゝもに恋わたる人のかた
みにもおもひよそへつべからん人をだに見
いでゝしがなとつれづれも心ぼそきまゝに 修身
おもひなげきけるをかく思ひかけぬ人のかた
ちけはひもまさりざまなるをえたれば
うつゝの事ともおぼえずあやしき心ちしな 細 尼君の心
がらうれしとおもふねびにたれどいときよ
げによしありてありさまもあてはかなり
細 宇治の住ゐより 孟 宇治より小野ハ 孟 和の字也
昔の山里よりは水のおともなごやかなり
つくりざまゆへあるところこだちおもしろく
前栽もをかしくゆへをつくしたり 孟 愚案 女人

ひたゝならしを 引板也
鹿を驚さむため也。夕霧卿
みも山田のひたゝもなど
ろうそとよめり
かの夕霧の 細 草子地なり
宮の地形をかくといふ
られたるなり。それより句を
切て見るべし。〇 此詞ハ
夕霧のうへし落葉の
心をいふ詞也。ハつるを
山まよりかけりたる家
細 ひぐらしはもとの句に
かゝれり 盆 此詞を又落
葉のかたるといふか
りおゐてよい前
まつべし。陽母など
のかし 山くらけてを

（小野の御方）ぐしたり。秋はあはれなりけれバなほのゝしらるゝも
（哥九）哀なり。山田のひたゝとて雨まうけたる
ものゝ心ぼそく、ゆふぐれ女郎花は前をうつひ
（真之）けりしかつり。ひぐらしのなくさとぞおかし（細 落葉の宮のこと）
（哥 夕霧の心のうち）ぐしもつまどのへとかどもも然
（細 句）られたる夕霧の君を御のおかしき山里（落葉の宮の母御息所）
より今まさしいりて山よりくらけりける
家ぬるれバ松にかけ風の音もいとゞ心
ぼそさまさるに。（落葉の宮の心）ひとつかたまさる
いかでかなくさめやるらんと思ひ月ゐると
（きん）わかき程ハ琴などひきすさみおぼしの尼君（細 書陵の尼まつる也）
どりの人ハ琵琶（びわ）のさるゝにあつめおかし（細 尼）

盆年よりらうたき人の
引く琴などよくみて音を
おひ知ろ落葉の宮を

身をなげし 三 雑々と
とかとニフ琴のさをひき盆繁が
てゆくる秋をこゝろとおり
ぬれるもひまなくさいと
みりくしとくめくよ身を
なげきかるさらつらくと思
つバらやうまあれバ読ミ
がらうことよりてとく

（その落葉の宮の御心）家わバ志のみや。つれ〴〵なるまゝなりけらし（御かうこ女の句く折落葉の宮の心也）
ひくしをあやしうりけり身みてものどうか
よきゝうのことをべき事どもあるらし
くべいかくりかゝしき海するも（攻ハ細ま）
宮すりくれとなくさむすさまさるへの心を
やるめかなりくよつけてハおいづる綾わさ
おしくりのなかれけりさうと秋るがくら（三 落葉の宮の御心くへきは知く）（細 是より御方の志とそり）
おしくれいまするくひよ
（落葉）身をなげし涙の河のはやき瀬を志
がらみかけりてもとめし志の行よ
うらうきれバわきおもうしろめくらく
うとおしきまでゆりひやうかし月のおかし

めしとられ
それくて　細　云義なり
ちうこじらんあらめて方
のみりを云ふくる事なく
孟氏世よおかしくへておる
と云ふ人へもおうまぐ
をしく　師　月の歌を
うぐ歌のるりをいふて
うぐ拙やいうよすらひ
拙只と八母系めのと得
太をあてと云ふ八卦ろえ

梅るゝくかい人へ（光孝注）しハえんようゆよこい
かし人へ云ふつ海くの拙ぐかりるてしと
あまうらかべきうとおりれハうらくと
しらるぐめく
（浮舟）まれりくてしら世の中よめぐりあと色非
かハ志らん月のこゝやこよ今ハ限と云ひし
程んこひしき人へ出月のしくどこ〳〵へで
へさしと云ふらるれもぞしで拙やいろよまぐ
ひ給ろんめのとゝろ川よいうぞ入すく
よるさんと云ふられしといろよあへうき
ころしきんいでよあらん〳〵れ世らり
わり物とくいうぐらうらん〳〵みしうる

ほうさ人のうろ山里に
細　氏山さくるよへ若き
人すぐもうし

多うの人へよつけて見しと
さりよ　拙　氏京よある
まま仕への人の事うる中に
ひ出ふて美白あるの事さ
ほ出む礼やしらく見ずえ
さのうし世るよあらそう
く　孟　ゐうしに従来が
あうかぐよ緑氏世らり
わりとゝのうくる
まんとと

あ人へもるらしまくよぐしろ川つうう
ことなくうらひとるれとらしゝ云へさる
どもおりくハ云ひぞくしうひうさ人のら
わる山里よ今ひと云ひし人こりとくうさ
きひざるうられバ（孟小野の待之）ひうくとしへるを
あおまと七八人ぞつゝのひとうそへきる
それしらぶ（白玉）垣むはどやうらのられ丸京よ
まづく人へもるも（まま仕ふる人さ）くさ海をそあるとて
離ぐぞさらしひそるうやうの人へよつけ
てうしきりよいさうしひとのぐうし世
よありくとられのもくきられるそま
つ〳〵とぐくくさうしるべしいろる

歌よゝる　細 花鳥の説
弄 孫腹し 花 昔人 歌
の人といひしほど歌など
と聞とゆれるにみ
まだぬりよへるにありや
しやとといひおりれ
ど細なるは似ざれどう
ひろきさんに孟 同前名
おもかげぞ いさし 同
世中にあらぬ 細 常よ母
いの浮舟その縁者の
ことを思ひ出るの別の
川前に年月しよの

えうせんとすらんとしづ心なくぞおぼしける 孟 竹とりの翁よりも今ハめづらしく
あやしかりけるかんだちめの北の方にて
もえしらずぞなき僧ごもりさとて君乃 細 二人の尼君とこゝのさへ
まだ人は見ざりけるかゝるそのことぞこれ
浮舟のこゝろひ人なし
うちにひそかにけしきまうこめちかく侍を 二人の尼君と浮舟の心と
若き人こゝにきゝたりし似たりつゝかする
ぐしよつけても世中にはあらぬ所はこれ
にやあらんとぞかつは思ひなされける
ものゝふのしのびてはけるの
まれ〳〵ふるさとへゆくこゝろはしも
しぬんとてぞかつてあるまじくよ 細 尼君をうたがふ
もとしてしもおぼえのきのむかしの 孟 尼君のおほむこと

ぼる年月のうちよりちらくさん 孟 是ハ浮舟の母の事と浮舟の母の事をハ世のよしも
うくまし世の中にあらぬ所と思ひなしても
しかても思ひさうらとぞうちしめりとて思ひ出給ふ

横川によかよふ道のたより
於 横川ハ小野のさとち
のちかきみち
ちかくらとぞの
弄 中将も小野の男をとめ
しげくさしよらんてはなしけれ
ひ御さま思ひくらし
思ひやりなく
細 浮舟の心より思の
うちなぐさむへの心
よりつゆ白きと言と
不思ぐゆの思ふ
白衣ハ上への心にとひ
よハ心にさぞおつせさ
ゆうらん

も中将にて物し給ひける おとうとのぜんじ 中将の弟也 三 僧都の弟子となる
の君僧都の御もとに物し給ひける山ごもり
したるをとぶらひに はらからの君たちつ
ねにのぼりけり 横川にかよふ道のたより 尼公の聟也
によせて中将こゝにおはしたり さき
うちをひてあてやかなるおとこの入くる
を見いだしてしのびやかにおはせし人の御
さまけはひぞさやかに思ひいでらるゝ 細 宇治の事を思ひいづる
これもいと心ぼそき住まひのつれ〴〵なれど あはせての何と
すみつきたる人〳〵はものきよげにをかしうしな

多くのうらみぬすぎ
お中将の歌のんく

しらみりしね
三 ものとりて

してうき世にかくろへても世のかくろ
ふかきさすへしきみやうみど咲そめさ
なよなよのうらみぬをそむくこのとのくだ
のわかさあさりして きみをも思ひさりぞ
くまそしこれは思ひくよしびとへいれんだ
しらるゞあてゐかりとし哀七八のわくれ
わびとくのひらくるかくねと悔りそひけ
しりおもに尼さうしぐらもあそでうく
てさいめんし経せけりらるきそ尋此の
いすりふは尋めしていでけど思てのえ
るん侍りと山里のひらりよす紙せらこ

ちくくろわれがかゝる
細 尼君の世そむかれたる
何非敬よそのづうらう
雖 是也たらとく 師云
ぶみしうきのちうすき云
れど彼くもやうのぞ
きと世をそむすれば
あるは此さ悔よいまげ色
せられてとのうつる翁
意せしとく
つゆのいそうら侍るな
師云こりりを書にと
みろい人ともおれどもわ
とくよあそいふへり
しらてさうりぞらなる
とく中将よ志くしき
へいちかく
ちらひせきんさらくて
よ 細 同尼をつきとく
へくいぞなるとあ

とう川におやしく恋のふるしのくもんへゞく
細 中将の心中也 孟 これより詞也 細同
のしら義よ思ふしくこのことども思すくし
まゐりおこと あるがちよすそたる
れがわかるれは捨よ とこそわつたん
お 幽列世を捨て山住とも云さきくるかりて
山ごもりをらしやましう つゆよせる
侍ると思ふのしくいなぞしてひせぞける
なへてよさ悔さけしうくやうよ侍そな
んぞよいられそふさもてくりのし侍つうと
孟 尼君の君の事也
のまふ山ごもりの庭うしやうは常くはや
斎世の人代にすねのやうなるを
ぐもらくされよめまりびよあんむうしと尋
わされ
し言ぬれうしろたへまじ のうろひと経そ
ざりけりとどそろうなすしともてさる人らて

盃なきの紙もくしくなるひ侍らうさ海ひけられて、ぐるくおきそなりしかうたる
そうへどもなくしゆかりすそて出さらうより侍らうすり
ゐるびのせくまうそりしらそくるさ　師もひ（ひ）かとても、うかくてありての世のすゝくもひかうかり
うちりなきりそうしるそのくるのなりしかうそれぬ侍うのうちてあらんかひかとこすみをみる

細ハチスノミ
蓮のみ
茎ありの
蓮けみさうくきしは蓮
子數盃妄令酒人集
墨文のなさられ、蓮の
実あるべきさよあぞ
盃とそのことなりとも
わかりよしてとめきる
なかなく細の注泛を
可用師説

とうずりるりもまのそつべし
契注舟のうすとうらも
なべきしく
姫ぎみいうれ、紙し　細尾
君ほ昔の娘（ムスメ）のことを
せりひ浮舟い薫大将の首
のうちを思ひやうく

ひかりきし　細　尾の中うり
住まなるよ紅の捻ると
ひ（ひ）ご色みうらべし
苑　梧胞衣え　お（か）そ蘋芳（スハウ）
ようけここのゝくく　沈田
なりは蘋芳　つゝ
ねもそ深くろ抱へ出家
の人多く用ひし

ものさ人なうひへこ姫君の
孟尾なのそれあなたへひへの
なうの尾のさいこめの海
来とおもひしく

わりゆかくるまじりみ人へごよきもんなとゞや　細ひめの飯とは読て　いゐ水飯
うの物くさを、ゑみもうすのとみじかきやうの　中将さき
りのいぢられだ、すれよしあからそて、さゞやう
のここそもつてるさこうしてむしろ盃の　ここかしこ
あり出るよしとじめられて、物領志ありやうよ　細尾君のらくし
しるのふりひ君くあらのふ人へようぢもどの　尾君のむすめのさしん
君のれんぞくるどの、いて井すよやをるうし　細中将さきえ人よせんのさし
と、よそのもれよ出るしてなあんにしらあ　細紙むすめ又まてるさるうしらし
きるじりもれどうく紙ずよとしめ作ゞむじ
此よりんじ、点志のぶらるすりもれんべし海さ

ゝよりくりのしなへるまつけくさじきんぐうう
あく衣よ出ぶゆへりめうやうくよ、とりぶてくう　細出たまひのえぼし
かもとなひぐくつべしびめくさいぶれい紙　細浮舟と
と出うりうさ物わりて、すずわりつくしまへる
さ海いてく、さらさひとへのいとく情　かうけ
きすくおさやぶるよなく海をひりくさき　三紅のさうかさう　衣ひとへの張きうなや
よるうひさうりや、光をさうてむぞくるなる紙
なきせさそしゆうりされべ、りひくうしくも尺　浮舟のえ
しゆ花りわりて、あやなうくをあうられく　細浮舟の衣装めかさ
とつくこれ、く志うけうくさうりそしわりかさを
きさまつるしをいりかりしとこすてくさなりつれ
ませるうへでこ姫君のおつりまはさるくらの

ぜらしくハむかしの御
よ 孟中納言ときこえしハかく
のやくみうかぐるに海舟
くひろくよみうし給ふと
三中将ハ此海舟をあそ
せ給ふとぞ
それよりぞそむかしなす
ならひ おさなきのすめあハ給
る業などのなすらひ出う
れておりうんとぞ
むかしへハやるこちよ物
ごう給ひんやと おお尾君
つむとあのさう竹のうちへ
仲かねの尾のさすらへる
うひ出るよハおいほどこれへ

ことは給よ中納言殿ときこえしさてまうれがなく
義よりて出るのしくは昔の海より出れ
しせをせつやいとまさはあらひろうん
しとうひあへる仇あれ〔細 自然の衆也之〕いうじや世るあり
ていふめもつるにとくはさへんそれそれ
ようけくぞむかしのとしとおもへさざ
やくのすらハそうして出る〔孟中納言之〕んとおふあ
まこんりまへるよ海らうとの風の気
多ととこゝずつくひく〔おかねの尾之〕おかねとらひし人の
乙たとるてありてしひすとまつり〔孟中納言之〕むら
しうし人ではつれてる りのそしか
らんやしおもうとしうりしをうくろこ

人くのうさそそひもおかぞ
旅々と ろへしあへと
し
ゆのらくのつまつうつ姫
細 中納の廊のつまらう
のつゆ時の幸をとうり
まてのさ海よハおつまトの
あろ人 三 海舟とを
よれのひま う中納乃
ろうし
ひとの人ハさてしまいてと
とうまつりしとぞさよ
三 尾君のひまあてゐる

ともこくなりよまりを・こうろあるされ
〔おかねの尾之〕しやされもくらわし給んなどの給
つうしまうりすれよしかりして表あすりし
昔のことじも出むさうつしぶ よ〔中納言〕のらうの
つま入うう姫〔細 南海出さき之〕風さえじらつうせぶれよ
そぶれのひしまらう人でのさ海よハおう
おじらうつ人のぞうされうこのさして
たは母とそ出さまへるおくうりよされぞと
多んとおどろされつうとの給〔細 奥の方へ…〕昨夜のさち
おもつつうしろぞそきまうり出るな
めりと出て〔細 おかねの之〕出して海りつのことをさらば
とうろよまりまひろんうし昔の人ハいそ

盍 中将のきみひとりだに
これをえせよといはれ
とも

ゐすずしさをとりまれが
く　三 尼君のくり
ひとさめとまをかくさき
みずしぬ人にもえてまつ
て　三 宰相の君にこそ
さらる

中くらなりとも何 帥 のの
はしきえなうる人
人物をしりてうくる
くらうなべし

こよなくとりまさりしてぞおぼえまさ
されどなほ給めりとしころひとつに
そなたなるふしれどもわれずなく
こめるのまめうし給ひてこはずしぬひとを
そうそしまゐりまでおほくれの人物にせみ
し給めりとならしけまつる給をいう
おなくんじつんとつふうしこそは
まされとかうしてるまへるもしげに
いとかしうつしはのなのうつ給中
ないづこ海うよくどそのようよもいづを
とのうしまうめしてんとのとえへども

細 かやめの向し 盍 ひとあの御心よりてその
宰相の君
細 中ねのこと
おかねの尼おはさうし
中ねのこと

そのさまざまれて出のまゐりて人ちろききを給ひん
しとおりてうたまわよしんとくらうずま
そひとりまいうそれ人のもれひと
たまうまゐりしようずまうかそなひこぞいの
人ばとい物めくとしあはり給ふしきずけよ
わく海わうてもわびひまうり給はわるれ
めるじく給芳のやうめくまとてまう
らうずやとして蔵中納言にはあるうり給て
そうし給やうしうれどもうつはとくぞ見え
給へんずものあやの為ぐらまるんのの給と
まことにたれして尼君とのまゐりてなく

三 中将の例の人ならずして高めかしくのみ
まかりては同くは御前まゐりきさしと
盍 中ねのよく感じ之
細 中ねのみやのこと
細 尼君も宮

こと給へん 細 宰相
思ふうはまよ給れおや
しきにくらうふしさと
何事かうて人忠節なき
の物しひきがみてまゐにて
盍 こうらうもとい人を
ておとり
人のおつひ 細 人てのえ
るかくり 帥 少将の人こ
中将の人乃物つひを給
給ひとおありあるらうしよ
いみと
ふう中納言 哦 中ねのう
まいし事て河海よひ
あかろの息めうさと
をく能ともまうき紙
細 紫式部の息まふくえ
別人なりうらいつれそ
もと

いよハ秋さるてゝなかりを
今ハお世の首縁かく
め尼のりくるよおつるを
おりかりてよく

ちひさくてのぞくさんて世
よおつそくする
訳訳そくおきくく北人ても　義淳書
世一のすさ人くと云をめんなど
よ今ハかくそておゝ人とふかせ
とく
そうげのすさしおくそりさ
るゝりよハ　お月日とよれハ
眼おのやうよそうきる物ぞ
と思てとさんさそんとく
つひすみすし
いとど激ぐりてお　怨咒人
とやりくそひさんれんなど

あさよそら細と
物ぞのえさへつぐさくろすんせとつくさ。
いかはるをせうるべきさかめりし笑すすて。
ちんぐくちくりて斗しまへばめくせらう年付（孟　むぞとめまつるれて）（叔出奔しく来れ）
のまもさぞ哉しるりとちつ人のう（尼尼のむをとめのるく）
へまうくまくてまりりて嫉りりへらすく
ちうれれそゆうちてきてまぐさんで世
よおかすとを今ハ世るみさりのよさと
ハやうくおしかれぬしめじろりのこ
とさしおくさるるせりせまえしてまめ（孟　よ分る）
らぬりぎさよ立すんといふよつけてもいで（細　ま分るの乞えの句）
激ぐりそへそくさ今ゆうん作しれねど。（乞らり）
りやらくしりきくりろゆじよしまろぐ

おくしぐびし

こ分よおくさ人てよ
お中将の掛川よ本
ずてのさ由く

のくし義のやうよくじしれておくたさ
世るよむまれさんひくいううちもうん
とおれて侍れハ今ハ去りるべさ世るよおもん
くもちむぞ。ひうそしよてそむつまらし（孟　一句と）（三　路弁の尼乞とちよく）
くらそうちれとの路さ歯も。げよるよ（孟　尼乞のうれしく）
ふりくう何くしくらちてそてぞまりう（ちあて）
おまくる。中将ハ山よれくしつてそ。侍組を（句）
世づうしりて世中の物況し路。そ何歌
ハとまりてある心やちとさんてよ路よう（細　中将の才之）
まきせて。興ひくよあそび路ぞ人しの
えこ歯うケう物路をすまでつりぞよ。お（細　中将）
物よさちくりて。物義ゆるまさしうれ。（の猶と）

しき女とききしかり
きりのまにて
師 出家のありけるよしに
まへなく侍りしかるに
るよしなくはへるの人ぞ、
しくしもしどのこゝろし
かまれてしくて法師を
めまつしにかけくさし
て顔勝の心もあらしぞ
つきりしく

第十四 尼寺のかゝりをもありける
世をもそしられたびさをさびりのくらぐ也為 中ぬの縁語
第人かゝりてそのまゝのまふつぐくに風の
吹わけよりつりひまよりらうらしるすぐか 花をよそふ句也 尾表し上のあちられ
しげ如へてそしつれおしいつすらや そくらふし 三浦舟の手紙
世らんさらてわすさまいうつもしろぐ、
さべくの人もはやしぎり行まつの寐に
しき女ハをきころまじらぬまてそあめ
れぬるくれるり物い法しうぞのぞ只
すれば、地かやもん、ゆいんかつてしぞり 西 法師ハかりの世に女の作る所と
とのはどくもじの花これ花にけをよまう 殊所の句し 尾表の文
でわやちて見えしなびしるらんさ給

その日ろうまふこる。まず中ぬの
御うさまよ又小服へとらうう
こそは保舟のるまドムり
あろうべし
昔もひ知てきろ御中まする
ひのかぬの尾ろうぐも
師 娘の産をとらひ出さ、
中ぬをりてうそかねの
尾とく所まうるひとは
中ぬをりて守とらく
いとしいやめよ お中ぬの文
家ろよ僧されて娘なり
ちひ出つきく
らしうわりく人もあやし
孟中ぬの尺付のあるて乃
まよりどまくしてワを
尾出のこと

中ぬの句
表ありけりしられ、いゝかうう人みつわん、
世中をくしくそぞさうかよいりくれぬりん 細 仍花物候午どとをきるるや 仰 作意の花色のりよ婚君
うし、じりし物候のこうらもそうけれとの
縁まさの日くうり縁かもつるつくいまんと の退れ尾付也うこ
てゆらしくらう、さらぐさらりひしうりを 夫亡りま文、しゝのふつひしさしく
れバ者もむしかれいもうるひのおぬのあま
おどもも、紬くらう、備へしかれども、かりし、 公家の装束するれにし
いさどいやめよあまのお、花いすの、縁、物候の
つのぞよ無びしうへ備よりの、縁しん、 細 中ぬの句し お係舟のうくとも也
誰よりもくひすみかいづうりくれど、借の 細 尾表のこと
くみもとうけのまて、かりとゝうしりたる
人をわやしくそ、まとれ、いひ何ぞいづく 細 尾表の句し 師 物そめの心を云る

らうがはしくて　浮舟よ無
想の心ありて書るゝとなり
ひとしく山居を好しものゝ
をりからにてあはれなる
事ぞと侍らんをよくし
てしまへらん　細　若の流む
こゝあよそひにけまへて
三浮舟を信ひとめのうち
見ししかりくはりのすゝに
我物よ見んとらふる

てにさし[illegible]
つくづくのことがくはらするぐくめまこ
の月ごろとまかる人よるんいかなりとよふ
ともの思ひげさき心にもそ世よあはりとく
よしらかくしくどくらしげよそて袖をと
ふれべしの岩のうとをけらるれりけるを
こゝへらたこつ侍らとそいかくはなくわ
らはを此伴へんといふしふらつけらぬ
てまらうへよくまよしむ山ふかくさとられ
じといそてつぶしまして君つらむへ
らんうらまつけてふさしくれて侍よ
じきことよこそはいかなくすらよ世をと[illegible]
ひしよかなく

かくしの　細　かくさる風よ
はらびきそこにかくし
神名帝とかくる涙あれ
ども只をくらうとらふ
人可能あ極楽門を
名前の中よ不載ら
こく思ぶし　師く尼
君のりとよおろ人られ
がんやらくいひるびらん
とふよ前よどうひら
めよ我君のゆるぐんなる
ど中将のあうし

まくらせつるやるよ
細　前よ世よおりて今よ
君うらんりしをらり
げよ心ひてといひるとえ
おきハ尼君の北方の御そ
うりらへく　細　君乃
命し　孟つれて来て我
ともやしき我りふやう

ゆふしげよのおもふやうにしらべてうちみよ
中将
かくしの風よりひかれとおるまへしま
きみのゆゑんうちとくとも、とりさて
あるの尼してつれよりおまゐもこすて
この世のならうとまへいとふかくさけうこ
あるひとすれがうしろめたくもあらしと
そのをばいとおもやさまそをへいでう
とてさらよそう侍るはらしえきさこと
うりとそおまゐ　いはしさせつるやうよも
いでく人をすぬんしそらん
しりしらへてやうかれぬとさうへしうと毎
とぞ山くずの宿よとありこくてはとさを

みち志まりぬ人のされど
なり
ここにてはさもあるべし
三 ここにては此俗の
小鷹かり 両小雁狩
らうまゝにせそや 別ま入
ありぬべし。とめりしてくりぬ。文なとと
いざとやらんもさすがにおかしき涓
のうへしら海へ忌ぞ。抱てしんぜうすれ
どくうる心ど義るれば。八月十日あまり
のわどりよ。小鷹がりのつゝくにおかしけり
例のわきもひ出く。一同こしもりとれくる
くてるどのまうつくへまへくもあるべく
わまきゝ川ちの山のとるんとまうとひ
出し給ひめんしまへるみえに。ならし液
よそまし給とそく何しくの小女んの
うりゆりく何へるよなくるも
もののしれば。やまずそうと

よしてあのうれ
世絃にめぐるさかづき
それ世ごとわりまえ　細と
おもしろき人をよぶなり
あはれまとひきこんで
おやかりてのみ
三　尾花の実の母なる
てのし

秋を葉わる　紙　業のり
哥どもけりとよりまれ
と贈り給しの結ひし
とよりありてからうく
あし　盃ざいハ尾花のま
つりのゆのしもんえうよ
中ね　いりつゆし

何の時ハいつとものゝふがそくひかし何ハ物
と世絃にあくさきりまていつまでいくぐ　尾花よ智
ともんとうまん何ならとおやがらてうぶうりて
もうさけまし弦のまへりてりまいで
へかりれすまめのひてろすることも表し
あてそよのつゆのしるれあでうらん
でそでんよまのらで申らんうまきてんぐ
うまでとものいふりひうくのことぞとしいとつ　細よ智
れりてみりまて海らうとはいぞつあ
まんう秋をらぞれうぼうし給までそ
あうそれあでうしうて
中ね　はりしの智どとうひでこうれぞとしえか

中ね　いりつゆし
れなけの　細　松虫ハ尾花まよろりて
のやうもへて　つまうれあもよ
ろうし尾の口りまりまれ
へやうさとし　よ智のさび
りあをいうて
あまりとおりし　中ねをつて
うらんてよ智のつれまれ
いうり

あまえたをうりハ
細あるさ附かとし　盃尾呂の
あるく附ハきてしりさ人の
まぬさて　まうるのハまうて
ともうり
秋の姓り　細　虻への哥
みくてそあまらめ
け宿の哥けさゆそへ
あうべうしまそとし
盃尾花の哥し又秋家

れなけてよりて種男をまろうくとゑくうれだ秘す
のやうもへてつまうれあもよるの哥よ西とへりとし　盃　松虫ハ尾花よそふて
ろうし尾の口りまりまれるそ又いでと中ねの哥しあ　かまつる虻へうくもて答
へやうさとしよ智のさびさいくの哥よおもひぬあれのとみられ
りあをいうてとおまどとむれバおやまりまし何いうて
人とひひぞんもいてらくもさとへきへ
めそへるゝのわらくよをあられんとし
ひつしう趣がゆれどいゝへとぞま給
りゝバおゆらりあひあうくむあそり奥の岳
まめといいまめきさうへまぞめし中哥
あふりたまべし
尾花　秋の葬くつゆとけさまうりつうそ
ひうしきとけ秋宿まことつあとあえよゞ川

のまふかゝるひなとお
れくし師蔭さる行
者は昇下の御も身ぞの
是の前に尾是のまを
うしもし次の間まで
りかさこしきたと
そく
さけらてかゝのふし
おむかしの者のとがとれ
がさんと奴つかなし
くらみも托りく　まかるは
しがりきこしまふと尾
是のりひきしるよりせ
心みも身留是も今に走
なくるすと抗つくらし
とおわらさく
おこし是ともおかたで　こよ
習是の心中是は是るて中将
とも何ともあらかし是の
お家よらくよりふ
くちくるひの心とも小ば
ちかしもう居りに似合
もて今めくしぬ紙洞し

らつうり出し給めかとつ〳〵とらふみま（細 身分是の心と）
机くゝよりゆりよ世よあらゝしれん
しゆうとゝいとなし上母がらく心のうちと（身分是の心中）
いらしで世もし是ともかりでやむつで是（とさるおゝ手ゆ枕らかて）
まくろ人てろろれべりくちるすさつそま（尾さうて）（細 尾の和し）
をしらゝしひきて給らんよ心くら
おみ世よしきろかくいとし給ゑあすの（中将のすをつて）
とよめつるひかうすちよい母かうけ心そと（丈婦のさゝひよハ布をとまを）
とおするけなゝしぬ母ぞよれいつく心から
はそてしまんしあでひきうしつへ
はまするまらふいのこゝろざとかけ

さらのるくねよるし
細川里は秋てそこうん後
しくれ庫のるくねまめ
とさまりつく
まことよ心ろくいある
まうら　卯おふ中将を
心きくさけ付まてまへ
とふかし数徐みたさへ

まじけよまらやぐうしさととしいつしとう
志ろかくろう覚え由りぞきりあくうき身る（細 身分是の心く）
つまらりとゝえてくし命まへおさまれ
うるかくていぬさ夜よさらくかべさる
らんひさふかよるさ抱し人よよこうくを
てゝれてもやられりかし功りひめてまゝる
よ中ねは大りきりのおもらしはらしのきよ（業平花あらやて）
やひそいつゝきららすげきつ是のびやうま
ふえを吹ならして庫のるす高まよるあとひ
しうらりけさひ雨　よらくろすくいある（中将の台）
まじ巫子めしうこのをむらうてみとも中ちく（身分是のつれるさる）
らつくつよ今りじめらく長ら母がさらべ

さもなくては大尼八十ばかり
中将もさひとまねびやさし
くもしら　細 女房達をいふ
しくは今の世なども [illegible] 人
のなまけて [illegible]
孟 こゝにてあるべし [illegible] 何 そこ
君つゞけんと [illegible]
さるあるまじき　細 源氏をいふ
あはひては花君の [illegible] 人
よりは不定の世と哀
まさなく　孟 中将の心也
花尼の八旬ばかりの
のそぬる孫の女なるべく
此思ひやる不定の
世を観じける也
いでやこれはひがごとにな [illegible]
中将の琴をすゝむるに
あるべきなし琴を
ほめる [illegible] 草下く
あるなりとて

よこ笛は月にはいとをかしき物ぞかし。いづらくそたち琴とりてまゐれといふに、（細 中将の心に浮舟の事ならんと推量する也）それなめりとおしはかりにきけど、（いかで在本にさる也）いかなる所にかゝる人いかでこもりゐたらん。（何の事ともなくいふ詞）定めなき世ぞこれにつけてあはれなる。盤渉調をいとをかしく吹て、いづらさらばとの給ふ。（中将詞 琴をひき給へとの心）娘尼君これもよきほどのすきものにて、むかしきゝ侍りしよりもこよなくおぼえ侍るは、（細 尼君中将の笛をほむる也）（細 山風のみ聞なれし耳故かとなり）山風をのみきゝなれ侍りにける耳からにやとて、いでやこれもひがごとになりて侍らんといひながら（中将へ）琴を弾く。いまやうはをさ〳〵なべての人の今はこのまずなりゆく

とうなん [illegible]　孟 琴のこと
とは今の世の人 [illegible]
[illegible] 中将 [illegible]
[illegible] 今やうと
はやく當時ともに [illegible]
とうなん
細 媼の字也
老女の称也 [illegible] 我はむかし
は和琴をよくひきしと

物なればなか〳〵めづらしくあはれにきこゆ。松風もいとよくもてはやす。吹あはせたる笛のねに月もかよひてすめる心ちすれば、（孟 大尼君の事也）いよ〳〵めでられて、よひまどひもせずおきゐたり。（大尼の詞）女はむかしはあづまごとをこそは、こともなくひき侍りしかど、今の世にはかはりたるにやあらん。（孟 僧都の）（当世やうにはかはりたるにも）この僧都の、（いまめかし）きゝにくし、念仏よりほかのあだわざなせそとはしたなめられしかば、何かはとてひき侍らぬなり。さるはいとよくなる琴も侍りと、（孟 大尼之）いひつゞけて、いとひかまほしとおもひたれば、（細 中将へ）（花 中将の詞）いとしのびやかにうちわらひて、いとあやし

あけゆのくるぞ　細　より
りの志とつゆなり
喉　皇嘏乃らぐく。若気ハ
よ宮とよふするぬれこ
こ

さ笙の篳のねとも五だ
五　篳ハ盤渉調なりと
されなもまぶず大尾志の
和琴をバ心のきこしにて
あるなり
しかしてあやめよるとと
とせ和琴ハよめつらし大尾
のとふなり

そけつらちりく
細　篳の多を志ろぐま
よろしくけからさり
くふう唱歌く篳の
者の志みりろくさむ
孙て花ろうろりとよ
けだかりなり　和志
ハ篳の唱歌と和琴に
そうて尾工のひききく
なり
いやむかしのこころき人ハ
孟　當時の人ハしも大尾ヱ
りつなりていそ

きこし給せりし笙の笛乃舞給られ。扱でらく
いみたらの所よハかぎろうすでよもられらくてく
として天人舞ども出しあそぶててこそ
らちあれどもとるひまぞられ罷らぐさとしら
んど轉らく給しげやともろきはいてよ
はわたらえ　尖尾白
しとやくぞとよのりりれくぞ。おづまもとう
細大尾の気
しといふもこちふきはさてそどんでいを
ぐるしとせりんどもそらり川とさんらしめし若
まうれくとのひろうすれバいとかしくて
そうもそひきせきと
せりせらりかりしそて。すでいまの笛風嘯
大尾の和琴をき
篳の調
まきとこきしおんをきく
ども彩るぬぞらでどのがうろよやつまさく。
孟　おの假よさまさてそひくく
おりつまのあしくべど。つまのまくやろくあるくしめ。
られしくりのそさ出やめつうどきられとのき
めでさろとやく。よけかぢ琵りしさうり
細
られるぞりきく人しくらかりかひきさう
くし紫ども出うのすくかうめきさう。いて
中納言
おりしうい海の世よきくしぬらしくびてそハ
喉
唱歌乃うもし
大尾
ひき給くれと御むれバろうて御のぐしくく。
大尾の御もと
中ねのかめつらるとやとひきくと
さるうしやうひしよとひきさて。四季のの
わくきひとハりやくのてしとぞうれまれざ
孟　よ男のきもし
つまきり。言まよ同。うろりのし給めの聴きぐう
さらハけうらよりのし給めれどもりくらう
まうあざりざるあらし給りぞ。ひられてす人
孟
大尾く
りのし給やうと我かしてよまうらあざわう

うきくもまされ
師 ゆしのすなの今の日芳
ろするるよりころもさく
れくらり
ひそられぬ 細 面白さるる
ねらう 盃 文選に絶に八思
旧の賦あれて 師こと
かうするしちう芳のそと
え小芳のことしつくると
めしくしま芳の恙れすて
むら
あのうれぬへくハすきくし
きまでも何久 惟恵ちん
ろるあひすゞバるとにすまでく
ちさまでゐうハのひくしん公分

ひそうるとおもよ恋へすぐハくさうつるとかくし
とゆかとられよしとられさあそて 中将の文 絡
絡を山ゆうし吹くゆゑかえの意に
おうちつ中芳して ゆさあいすうつしめて
細中将の文の句 人ハうさくくむとざれ仰しくバりそささま
ぞ侍し
中将 わそられぬひうしのつゝ 鹿言 第何のつ
細 芳恙をつひすひ さめすもねざるれかう。妾
しまちと しらうつりそしへすもせさへゆゞれぬへ
きまと くいもまさくしさまぐも。すまうつてあ
細 尾恙え とつしまひらいすうどめてさげ芳

恋の夢のに 君芳のしハ庵
恙の飛々しんもあられ
あやまつしぬろひまつしぬ
もや 細 前によそもくら
なれわざわさるすどい
ちくまつをもし寺 尾恙
のひとしてし
萩の夢よたくなわるよ
盃 細 して 音信(おとづれ)と中将
うらもろくそそなるに
智恙の心をとりて
和ゐうすろへしし
ぬ色のそすなり

見恋のうれしかうしのもかし
尾恙 第の恋よ芳のしくもあうれてくつし
絡と袖そめれなしあやまつ抱恋まつしぬ 女の句と 盃 芳のし
ましゆらくええ給あらさ夜へおつびとの
とかそつうにをきうしめハしとのちい 盃 芳まで女の句
細 尾恙の恋するれて 芳を絶と めうしぬもぐ前なさうくく。
しちそれりんし。萩のそよとうるも はぎ
絡くよをとづれさうゆくとろとを 盃 芳恙へ
あうれ人のうろハあれじうかうやうり
かうしそちうかしあうくまやうく恋 王 白女のすみよと知まへし
芳むくよ。和うりもぞりのつしひきよまさひ 師 芳恙の句と
尾恙よ子のひてむと されさへてく夜よとくるすしをてよ。そ
鏡すしひくよのとまゐうくろの内みもねんド

九月よりく　孟ひを
めのとよりおさの書を
わたくしまなべそれを
ま尼文のうちにま
いりまして
くわしぬ人とも光ねお
おしはぬ書をよむじまい
のあまに光て他人とえ
なられぬらしく
くりやうちてまうて
に書かへりしいふ気れる

まうり、尼君の心は娘の尼乃すゝとなりてかくしくれよつけらく世中となを
これぞワろき人として かりしやうなることを
しるよりすく、とりてけれさらなどするあらと
ぞみかららのさうかいきゝ何らしさよくち
けのとぐ心ゆうしてあけられの孟母の尼綿にはゐる
まもらし錦らしひ給ゐりいいなぞらしく孟母孝と尼のこと
めでしさきのよ云ふ九月中からてこの
わまぞなりをよむうらい錦まじりつてん
わもさらは無らしさ人のらんと云やまれざに尼君の女のうく
てもしどうくわらぬ人にしも世がし給ゐぬな世めうちぬてもものそと
じるあとえられぞ錦書のはなつしれいまき
しそくりやうちでまうして給ふうけり

まよのいちくいなら和男るを
ゆかるに給ひやしゆうり
まくしざうとぞり
くひしまくてさせしを
孟子せの訳書ときのこ
つらひりのしとうら
ととちららもて式ね
の徳とと慕って又うわら
るうもわりでさら暁
今ずるへらうよ叶ひて
細へあうせんとせしもん
ようるわざうくしま男な
い歌書の利生とかさと
とうぞ綾波不能波乃
歌をうあうれざる退
たえる人よぞらく
孟母と云ふぬ人は白石
してりとし他見はまえ
ぬ人のかまをされて来る

孟母は男君と尼公の注なりく
いざまくへ人やいなうらんと十うかなしうるれとに
さみらの第まととるひさうなん云ふ
てよれあし世わうしとそぞのしられ孟母男君のこと
しおゝて君のとるそぐやらしまひ云ふ
せうしてくまうりてさせしもうひるさ天
ここそあれ令さんなよなすうぞ、ぞひ
なきいうじきめとこうゆとひさき
うちみも云ふくぬ人なぐてはさうるのの
ありこえとたてらんしてくさうそ兄お歌書の母君にて利生ありてる
田んごとさるさ向ふはいひもうかてらち
のいとあしうのと給われはさなるしなすらんうち
の猶みもいゝくみぞつまりらるんとの給

すべておのうちどころの製作
にや侍る

られくて　細流を川
かた河のべにり二本ある秋
年をへてみとおもひえ
ん一本ある秋花さる乃
菱二本も白菜とふ
とつり。武流えあ侍り
なる秋がつぐ年とかた
くも秋のおへい二度引
べうらにとく　二本かう
まそすがらへてもみひる
まくとうき流ぞとたら
それすらハかしろせ人まい
ひそても曲あしとく
二りとハいえをおもひまてん
とおのふ人ハありべし
御由君尼の寺にかき
りしの秋とりかりいはも
おはりんとしかどと人か

（尼君の心に物思ひとられたまへ人々まいりし事）
りのやうハさうしてつさんへぞりしとぞ
たてそてもいづれそん
（由那の寺）たゞれくてよよかた川のうきをりれ
ちるゆもゆりし二とせの秋まぐとてたつきひは
まぢりしるを尼君ちうけて二年（尼君の詞）ハかうきも
おひ出しんとおもふ人なるべしくぐえんふ
れじとをいひそてしうよむしゆづれて秋を
（由君のこと）てあるまでるもいともあのぞなうつきらく
しげかり
（尼君）かた川の秋乃をりしもちまてねともすぎ
みしひとよまきんとくぞろうつことなくうこと
（由君へ）かきりへとらうしいりしハ志のひらくとい

ちらくらうれうくしか秋よりくらうかり
かた川乃　細　由君尼流人もそてもあれ秋子のとくとこし　孟尼公の花
みもおひんとおふんへとりちまるんともぞく秋むとめとこ
（細）流れくらくとうひまうく（まし）
どうれ人志うかひつくうみは人はかるみか
（由君乃おつきんうとし）ておいきんとんぶるしじりてぶらをあるぶ
ねれあまよ尼君（女ぢうく）つとそてわろ杵とられ
まくハざうりぞとぐめくうちきちられい
（由君のこと）ぐうらわうをさうかめいそくあきまりし
（細尼君へ）ことをおもひなかくくも。今こんいるらんと。
よめりし人へよおもふ人ひとくくのり給うね
（一かね尼詞）ハぶかそくるもあかられとひらんぐたうし。
中ねのいわふえあらはんをうしてんどうき
（由君のし）さうきもいれ給らとず。いとくひともうらくぞつれ

三丈集らそおる中のうき
人　三　尼集ハ尼り
おもきる秋わらへとを
まる三人ある氏

（細 かおるの君の心也）
づれとよしくさりされをおろし給ふらし也
まさくもなりめさせ給ふ人れは碁うちせ
まへとりみていしおやむつきそいおはしう（匂宮の御心碁もうまいのかと）
とハのきみへとうしうへとゆりしられなん（かおる君）
らりまやうきく我つしとさつくさへきて給さ（孟 姫君はまけんとしせさせ給）
くまろうさるまいてへさてよるくれバやうさ（しかおる君まけしかへりをうるなしなりと）
てる絵してし川かまら人へとらう思てきを（かおるの君の心）
給えるんごれは碁うきてそまうらんへれは（孟 碁の事也）（孟 匹君之）
碁ぞいとつよくらし侍従のさまきてうう
よりつうじうこのまをあそてけまてハおら（侍従の君）
ぜうとしまとこりしとてへりよさせハおやしくく（まひしとき）

左世ハちどこ　細 梅の良利
るくおはそくさら　明河
ハ碁勝うしめ河花　碁
聖の字可然の字聖勤

あ勝侍良利ハ肥前国藤津郡の大村の人也於部して寛蓮と号す法師
にまよ法まし山おくしまの時は侍りくるのよ和橋侯ほの世時り碁のよ手るうふり
て碁聖とよろう延喜十三年八月三日奉勅作碁式献之拾遺抄子日聞碁者世
謂之碁聖故嚴子卿馬綏明有碁聖之名者也
さしいそくこそらびつめ　孟 天下の碁とハいうねせく　仲 まもうにんとつて知れども
元君まよまけしと侍従のまめうしと給くぎれども元君をうち給しく

はまけじうしとおく　あしまうつねよ侍従な
人からりまけ給せ給しくさせいが碁すハま（自分の手へ碁をうひとく）
さしせまへきころありあれいらしとけらど（細 まかる君のこと）
れバらこすざころめまびくいのくうわよ掏（いふれぬ碁と）（不見せとあまつずら）
ごのくすうよむ川しさしるもおそめそげ（ともしきえ）
おうれとおくらしらおしとそうつまねばご
きれくおうかてうりてかうしすをおさ（元の御心）
ら洲男をいうじうおづくてりて分させ給（孟 まかる君の心）
こそらおしくまよこずすわんられ

むろしさくるも去をめ
三　碁をえもうえんを
ハまんまとをつて

あまらすわらん　河毛詩
曰白圭之砧尚可磨也　三河

のこんは及びを只五の手
もくぬべし
ありひいつくしかりくて
唯き毎くのんくを思く
まふしてんむ哀之音
ありハ　細　何かゆも分別
さぶら身るれどもとこえ
果早下の夕も秋の夕を
とうひりねん見れど
りくしかり
ひら文わりつる中ねかわりつる中将
おけるかまへよそえとを

待れとりよ夕ぐれの風乃をときとわすれまう
よ思ひつりしとかりくて
浮舟（ほん）
ふみは秋の夕をまろぬどもとろすむしうくの袖
よ哀ぞ、さぶらふ月さしいぞ、かりしき夜よ
ひら文わりつる中ねかりしける、あれさくそこ
自かちゑの心
ハあぞよとかくしまへど、なくふくつる給と。
自かちゑゆくに入らる
細
時ちゑの感
かねの匂を
さとしあわりみもおりしまてと物くれにてわ
仲中将のおいせり志を表く
とわりめせよし
うし代澗にも、哀まする事りはこそ待めれしや
のゝかもこきて給ひむしもきこうを云へ
もくいかんことのやうよかりしくらしそそる
右男の心に
どつよ、いつくしあめくもがゆおはをねまよ
おかそねりしどんへで
おりてしか将尾が中将よりつるし
しとの心とひらのつくひの一下分じめ
ゑうりんとのやうよ
細　抱りふうてきぶ
よ勇れさずよいろし
もく

山さとの　細　中ねの哀へも
芳袈物をふ人ハすぶらお
つれとあくくずぞ御ぬわ
ふいりむしと物ぞ合そ
ひとことぞきるをとそ
歳名妙りろきあちり
とのゆく住ん先もゆちへ
さ　云　さびひり物云ひ
のあれ勇ぞとなり
仲まか抱むひんとも思
ひさりあるべきをとこ

ひらのつくひの一下分るし
孟中ねの数ひの身ち八世前書ろよもしまする気と回頭まと
箋中ねのもしてえし
そえ、しぶとくとかりくろそ、ゆうみ
をとくはゆるしおぞけらくてこうえん
よ哀なくきいくしくも物かりしきれど。
よらびついひらびさくいくうかく、あけ給
けくこそかの哀もきされ、おまつらう
仲いたちきし山さく
ゆうえるじあぞ見川、
中将
山里のわさび秋つくしあられぞきも
人いかもひしそされ、とのつりしれくらしかよ
かね尼の身ちもら色
ひあくかをあしあれど、わまござかみ物く
きぞ、ゆうろうつしこきしありさ人へもえくら
をいつしよけるねやうさかんとせしれた

まことにかゝることゆへこそ人にも今にまでかくれもなし

こと細に 細之ひとりと

ゆかりあれバ早下をさ

つまに召れてかゝるのわざ

もまれもなさことなし 三位

当ハ木心のごとくにして物

の哀もしらぬ身なれども

ゆの昔よりの法度なるゆ

へなり

おいらんのはなしの事

三 かお尾の名寄と云

つかふ同まへひかれこ

ふ也

師 このわざハ尾ゑの名寄あそび給ふかとそれにあれ 三尾ゑおなれハまへのかりにも名寄せん今もさと思ふ

息子 うき拘ともひもあらでましも身をと拘

思へしわれはあらけらも ゆるしいへども

なさをと思ひてつへまこゆれども いしわされ

とうかなやしも つとうひへくて

らくきでどこの人でもまりあさせでも

らしまちおやしきまでつれなくぞつて給

やそく いりてこれハ例はうりそめのまどし

のぞみ給ひぬおいらんのはなまよひ給はれ

アーおさまりしうもひきくるんとさこもれ

いうら取るみわら給ん心の中の義は

さ人のわしおまりおしらぬひとゝかりし

げよりそなし給めのここそそれも物ごゝり

しまへあり 今我いうるる仮よ世我根く

いうまてくかつばと人ぞおちをそ仮と

ひくいさとゆりしげよのうそおいされどこ仮

ろうら ハいろくゝいつかりそうふきんとうく

よりけましまづさ人のとしは かくし

こやうりそてあし給しよらけを体う

でおひまてよざなめしまへるとぞいふ

旅ざハいゑむつしとのそうくおいらんの

おうりまうかおびめしるくいゝもわりてまし

もぞしひもえもいいちん出かうく

ゆらひそるもうべらざさ

はなの玉ははかまふれに

よべてのせかなるめし

なる君ならまさりて

つれなくもそのまゝ

いはしわざらんへまひ

て物たらしさなど今もや

とし

こ顔かららるるふ

おびんくの月さるかこ

あまたハろくしるねて

さりきとしおつき人の

終 其ハ尾ゑの知まふ人

の強くしきさ思ふなり

しとおが流よてしるよ

おひきつさと中将まう

らうく

ひく川橋のやうなりく細少将の申しとき師頼
ふんて只男をとる人と
せし人の影をよ一橋
の花を見てくだされ候り
さくもりうすくし申候さ
あうさうこれとふ川よ
つと可用し暁月ぐ
三代集何の書にも見へ
さらしハ今に只此にむ
なさら、少将殿も見
でまうをるべしよて出
し人の不足に命あり
く又老尾りやゝく
まんしゆびうりんゆり

こりさく細少将もの花しよ
殿のくさもにつれて大
尾殿のうへ人形稽つれ
とも此中折ふめでみ中
将かいてまちう人形造

りさうくら細少将ぐんげを
さしくらくし盃尾どのゝほ
少将殿を見てゝ艶の
ようげ奉すとうく

そあのとけ候とせしきらん
三二よ強はとくれこう
るしくを時ハ何でも此志
らさうしし

しきりびきしつくずく人あまもけしきびきわ
またおうりのしてしどもくしどもびきあ
んせうり、ふしと坊きうしうこうひみの人で
しやふされなんとも、らくしうね男な
ま、ど例のうころすはさひびく川橋のや
うがりしくらくるうりろんくのやうにま
びしく坊がも、このきともりまろそおかんし
これど、色めきそしはめぐうしこ男ゆゑん
ぶらねしろうるまうつよ色ふしやん
名ほとまらるまくれど、いとくろまさの
りしハすりや中ねつひとしつくひてくうに
くれば、いしまさけるくしもりれても、かりしま

大尾の年楽よりこくにくハ
盃志かりしくのつ

少将殿の合

少将殿のみしつつ小童女を

ニちまさと若き娘よりわ

お尾たちまちなのでろとの詞を

ぞろれ、かくしうりうちとあるどもそくろうく
細少将尾申まく
それ一筋よわれ、衣中づくうやすらしゆ
らんと云ふ目ども、あまり殿もなふ目
めれくゆきうくらんハ目りけよりうしらーき
はいとしろきよろくとのうとの候ふさて、
この殿のおしまるとわやしがらていてかくと
ういふなさりのりきろうわざすら、ひこうかく
とおそくあやしーこれハ非そと云つねば
なりつ急ぎてことこうせうらさうさうれしてい
まらひてんとすうぞしと坊がゆの影のとり
りそこらけん往ハ海坊がしぶう申しれハ中く
ふやほてしいうき強よとんと坊がゆらむしうし

め大尾の落る大
盃咲二瀬子へ

少将殿く
大尾の詞く

少将殿の合こおまこまへ

へびとてやらまるんとおわし首尾こ
又あはっきで見うましう

速まおしるゝと
二ちんひの仏そろくさハうなせんとく

むつましともおそろしきも
三 むつましとハ中将なり
しゆそうし八法大臣なり
かの三家をいふべし
かたりけるよしれけり
花 冥途まそ罪などの
せめられんとし師罪よ
うけらんとして獄卒此中
この人をゆるしく
中やくさそしなん
細 是よりて自家
の一年といふより八家とも
みそぐることも

さかさいがれこ国まそいさくつ人入り
なりて文すりしめてのうきこと紙おさ
まむつましともゆそろしきにのをゆりよ
よえれおしりべられうこゆそけげるう
りの中にそハおうましとおやしみ
むかしらの紙せどろまれぬまうに
おもらをおつくろよいとくらくおやとこさ
こゑはん人のはりてともそのまわりとど
ゑらる成おづまとくるく年月とゆきそ
ゆえらつて年月とよふりしりく
よ国ゑるよしづるかりてられしこのり
細中家と
とおさこらしいつうしのはおそらくを思そ
自家のもろしきが、かくの事をそ
どそしらじゆえぶさうりさしよおいらとめ給し

いまの文 花 白家の許
年ごともふらんおう橘
の小将のこれよとらん
え 三 こてまそうよ自家
のおひうりくし
のこくよおし給し人
細 葉しおくよ思ひつえ
第来の去る定めるを
はんみしらん人の心を
ちひざらしん〳〵りうし
所りの実ありえ白
家のぬきすきさらに
八減よへまさらんなり

細葉く
入よはまつけていやうりくこのうさとなしたく
さかりべきこれりかよおさまうしりそしそ
こうすひさらおとおりそゆけるハ家とそこ
細 句とをかし孟 白と
まことおふむつかけの陰陽と
いふと数しつひますりんなぞいとまし
白家といひて
うしぬ〳〵この人の流ゆりよさとくへ
めらぞさしゆりへいうじまの家とそうしひら
ぞう給しとおぞそおうしとおゆのかりんと
白家とおもひてんじよろこびく
孟 葉のみなと
こまするあさみさるくらそいづめうら
うもさるありしものじやうを捨し給しひ
久の
とハいおりぼおりるとといづらぞこよな
多うかそ小野ま立し甚ままられんへ細しとく
くりせうつくてそぞおうけれどそつけら
まそまつんをうし二ほ〳〵なさこうま

ひとかりぬめべし
三 美よまくれん事ハ雅
しんくも飛 よ坂よ小花
まそ文をつうし時なる世
又ハこしうらし
継まろのかや 三 自分の心
心とまらんを制すう
うしうしてあれすくを
さうて 細 引きよ及べ
つらじとあるのまいと雪て
母とあひ知るも感
仏法ともこうぞハ長
我の宮はまうつべし
もし我山ゐの分らく
となくこもこうけらく
うとぞ母どもれ出
ふ 行基菩 三 個は音を
引うかをさも我の
あくるかられぬと父母に
まんさうこれハ人の子
の父母 うまそう寿かこ
ととしまるべき人を
そうまこてハ おも野乃
つれて ゆくつさ こもうも
のんハ法門も一人ハおり
くべうしべし
けまへくしさ法師ども
とわすさこそ信都をふか
つきせ おハ小郡へおうせ
くへとあり
おんは座の四位が将
今の中くの四位か
将 三 夕霧の息く

きりぬべし。ふみすぐよこの世よハなしけき
海をしまてみぐしうするいつれはこらんとまて
ふとうちそへハ継まろのかやうくさこうり
そうじるとどうろひしろとさへさぶらう
みづくるのるくをとこえていとくられし。母の
れぬなとをうてきうんいぶしていうるすしんと
出あしていうらをいとあし。ともりて
まろくべき人もとうるよこての。ハなが継かし給
つるよ。いびさの人いいとそうしてゆゝそしうか
どむつしさしてこり継めそるや。してお
まへよそく。うてうめをるしうりさせて以
じ。まうすひもいとんづくさうくうそして

ちしぬかうしてうちやましくるどこしとなし
ひめふをまおてつふきいとしらるしいを
ぐくさき法師どもしるどあるくさして信
都ゝふおりさせ給へしおとふうるで
又中わ人不気のれりけくけまうやま
を給ろ。山の座されど法つくまうせ名
へどみをそうけ法まいてもら給りぐハ志うし
すしとそさの二てびるんめし侍し左大臣
座の四位か将よ。ハ秋かけてちんの初うか
つましろ。給の名乃れわくるまと侍まれ
べおりさせ給ゐりたしいとそるやうよ
いひるすをまづしくとも。あひてわすれなし

いむことうけ侍らん 三僧都おりなば戒をうくべし

れいのかたにおはして いつもの浮舟の方へ 今やうやく大尼君つかはるゝ方へ

おやにいま一たびかうながら 三 ありし姿を母にみせずやなりなんとなげくの心

てよといはん、さかしら人すくなくてよき

おりにこそとおもへば、おきて、心ちのいとあしう

のみ侍るを、僧都のおりさせ給へらんに

いむことうけ侍らんとなんおもひ侍るを

さやうにきこえ給へとかたらひ給へば、ほけほけしう

うなづく。れいのかたにおはして、かみ

は尼君のみけづり給ふを、こと人に手ふれさ

せんもうたておぼゆるに、てづからはた

えせぬことなれば、たゞすこしときくだ

して、おやにいまひとたびかうながらの

さまを見えずなりなんこそ、人やりならず

いとかなしけれ。いたうわづらひし

（細 尼君の事也）（細 浮舟の心也）（細 大尼君の孫也）

かゝれとても 細 たらちねはかゝれとてしもうばたまのわがくろかみをなでずやありけん 遍昭 後撰

前の詞書にはじめてかしらおろし侍りける時 上句は親はいま一度かうながらのさまを見えずなりなんといへるにかよふ也 抄同意

けにや、かみもすこしおちほそりたる心ち

すれど、なにばかりもおとろへず、いとおほ

くて、六尺ばかりなるすゑなどぞ、いとう

つくしかりける。すぢなども、いとこまかに

うつくしげなり。かゝれとてもと、ひとりごちゐ

給へり。くるれば、僧都おはしたり。南

おもてはらひしつらひて、まろなるかしらつ

きども、ゆきちがひさわぐも、例にかはりて

いとおそろしき心ちす。母の御かたにまゐ

りて、いかにぞ月ごろは、などいふ。東の御

方は物まうでし給ひにきとか。このおはせし

人は、なほ物し給ふや、などとひ給ふ。

（細 御頂を法師のそぐ也）（細 母尼君の事也）（細 僧都之妹尼大尼の事也）（細 東方とは尼君の方也）（細 浮舟の事也）（抄 大尼の詞）

とまりてゐん。うちわいところそのしあそ。（身分のふるんをいふ也）
いむこしうけそてまうしんとの法つうとくこ
おふうちてこゐすこのゆふしてゐるやふらん（細條報之孟條報の身分のかるへきもかりまし）
しわすそて木性のりとまつみてゑへづて（孟よ　細條報乃）
おしかれど。なうりうりててへる法。ふいてて
ことわりそめてしも。ころべきむりしのちぎり（聖君之　細之孟不意之）
あらげうようそとおまへてはいのりあどりん
じろよつうつまうりしと法しへそのとく
おそてはふころそてしけ法。しんとびんな
それども。そのんよゐるんとうつるうやうにあすり
作めうなりとあやしさ海にも世とそてむき
きつるんのけりうりまいうでかりしきこ
んとの法。世中まよ修らじと云てもい得し
のいとあやしくそて今せまく修うそとそてろ
うしと云修う拘りしきょうけよりのきさ勢
法ふうれうころだへをゐるんいふのひるまさそ
ちふもと云ふ申人志ふうそして。抑まげかぞの
こ。つゐまえと申ろまじくそうま申へらるく
と。おちまよなさせまそても。世中にま修ろとも
れいの人はまてしおがくしおくべく。も修くうぬ身
よゐぞきうて法。まざいとけさ死とそとげ（細條報の詞之）
たる法独よ。いうぞうをひとこをちよ。しくるれ
行しきくんく。ろってつとあるうこるうりさそさ
ちて。んをわうて法用とは。つまく。地がたを

法しはそのこしらずて
孟法師などいはれど女
のこくんの文うといへとぞ
ひといとし金言也

世をそむきゐる人の法ある
つまみ　おお尼君達の中よは
ゆうのおりしみくりんす

まうかのよ抱世さすせ法乃
孟思ふ、能よ志すらでと
修報の法んそろへのあり
うこきさろくいのりあと
志うさやかしくとし
つねよえと申うあしく
孟法よ世よせと云る
おし死ぬれえ尼よゐ
ことそとし

れいの人はてみかうふべくも
法くぬ　お女のくちうそ
しあくどしと云すとし
いうでくひさうこころよ志くい
法げしさうん　身さやで
まいうで一向よきやうに
はろしめしとろづさとえ出
家いは在の身とのふんし
へうてはつとあろうのるん

お家の末とけねん久く
つらく罷るわりとし
おりひさちて心をおこし給
ふれじハ 三 弥さき菩提
みなき人の後世の為にめ
ばかりてつくしよく弥し
おさなく侍りより
二 寄未き年や母の只習
を見すやうさましきい
へしまあり

あまる夕べさ弥しのやうく
ちうく おほね勇の御ろを
うまくのわ弥きよしく
あをいつしとそ 盃心を
まうく然され八お家し
くささし 師何とそ
しらく出家せまりき
とこえ
細の承をもさてまて
細いお弥しきこくのるえ
おりてとくよりものの心ひ
しことを侍彩のこひ合
せまふく

三寳のいとりしらく
盃仏の出家するう事ハ
むりうすしとし 師 仏法
僧を三寳とい久いつ
きまも仏としいふなく
三さくおすわるりつき
細 名達によく菩弥ろ事
るれとし 盃為て壽
もそ初どゝふしくし 三一
品官の中納のけ給え

の足之 細 ま弥のえの
中之七日まで乾八の尾
是還向まんへしとし

ど 盃 女あるハ年月とけれハ不思ものみ怖とし
年月かれハ女の中納もとりおりのいひと
とのくしききのよなどのまへむ 細 まおの申き
侍しりどころ抱をのことるべき宵さ夜よ
て細やなどもあまりよりてやどおのしかどな 凡
んおの給しましてもろし抱ならりて給れ
例の人ぞ夜るまぞし婚の色とぞてよとどふ のと
うろかつく侍しとるすくなる人べきと給の中き
あちうくるり侍りとくちらの心ものいつ
のまなり給りとるすをいうくとしそしらるうさ
つくの給おや 細 侍彩の弟とし くらうくらちのあさ夜を
かうそ当をいとつしくさうちしめまなかん抱
のけもさとそいのわりしろしくしおのはずり

よ、さるやう 三 きみ細りしそあるめ
るべき人かハおわりきりのくきうけそめ、ころ
よいとく地そるしくおやうときこりと見え 三 抱のけのかさし
しもとれりくまれ地得しさちその給をし 紗 侍彩の給
三寳のいとりしらくなお給とろ事う法し 法師とし まんさく
まそまぞ悪やもへきこりよあくぞ法の 了どを寳勇とふつきよあうさとし
ことろいしやまそくそうけなそへうきを 出家其き在りさんいやまをこうさきれとくとし
たうとこふなくまるでされハこゝひ の波女 ま中之
よまろべく侍りおすものや法ぞ法へ 紗 政治の附出家其在やきへ
ましくべく侍らん七日まてまうそんよ、何う
うまつらんとのことまんへべりの中よ君おうし 日和まめの内へ
あげかるかいひさまさがけそんといとく

つゆくりんから　細 是より
やうふそしとらに主人の
中しからつくりろ
らふあまよ志てろかにに
てまへしとらがまへ
すまるうこし

うちやまとて肉ゆハ
三 体無して義前見
とあり

うつハつそ　細 女房の
さちうく世ま居給
りんまやうふりろぬ
とく

かれの尼ハ世うとのあそり
盤 かゐの尼の見りのあさ
まよあひてみるろのこ
とし
古来ハとろさしの
細 傍注のりれまふ人を

ちかしくて、ふぶりがちのおしくまし
程よ志てろやうめく　細 是より詞也　いとくゐしく侍れ
ばとりくすつハつむこしくひるすくや侍らん。
程なふいましきかりとこそ思侍れて。
いとじくあさまんハひぶりぐよいとくお
しくさひく。　盤 傍注のほ也 細 面白き事也　あやうけ侍ぬらん。やまま
よりおり侍りてしりてしさと見え
給ひぶりしとよのまうすつめはぶみが
くるなれバちやもとそ自由はまつ
んと出侍とを志ろなばしいそぐことなれバ。
なふつうまうてんよのまふよ。　抄 是鬼の也　いとうも
くちをしけれ、ねなさそうとりそて。らしの教乃しめく

さしいそかれども、いづくもしもやつてよ　細 傍注のよひあまそし 盤 此事を傍注の
かへすがへすもふくみてゆめうけそそ出まうしすうり　盤 活字を木のトとそえ付さ法師と志し
あだしごとよみぐれバよびつれくほぐ
しけうしそそまつれとふげまいつまうら　細 宇治とそえ付しへ
しひとのはあらさ厳るれバうれしく今そハ
世よ地をさんをとうそてこそあくめとしわ
ざりもことりりよ出ふよ某様のうさびら
の海てうべうれりくを侍さいづしめるがて
すうしくおりしげるかまるん志　あやうき事
さうさくもりくやうやうひろうくら細どかね
の尼ハきうとのあざりれそうろまあひてし
ともみなりた古来てこのまさうしの志うりう

あんちくくうく

まうがはらんへ　細　傍訓の衣
や袈裟也

え恵ひあんまりて
三くとかぶ恵のんぶ尼へノ

人はあん志ゝふとそて。ぐうう所よつけてん。こ
れもりぐるよんてきのんでゝめづうしくうく
ありさうう。ゆうれきこともしろうらうれるど
しびか細とよ。こりさひとうしてゝうらこ
とるんとおねのわ申つよつげさりかれいずのと
ひろくとそてこうよ。こうが淵らんへの衣げさる
どもと。こともこうづうりとそてことをとそてまわ
まそて。地やのはくこと地ぐとしそて出ろうあ
へとりあよ。必づうさともし志つくね順ども太ん
え志のびあん。語あそでるゝさ語よけり。お自
あうまし。やるをくるゝあふるうさことはとき
世のかくんうりかんしてゝいうろゝしせ

ふそん三くひ　細　流轉三界中。恩愛不能断。棄恩入無為。真実報恩者。
しらすそて　細　恩愛不
能断
常の身ハ釈あどとを
思捨し身とつりて
ね釈よそけうろ身をすて
てよ捨るハ不普人
と捨て無るよ入こゞ真実
の報恩ぞしく。釈の行
出釈釈とも志てぬ
ど無為ハきらそて
とよ無為のくく

細　弘乃利生是の
きんのまをいけうそけい

の絡くきんとしゝへじゞづうよ志ろそてめつう
とゞひらうともりのしとゝゞつてぞゝくづい
さめうろへだしりてもえさ海よげもあそて
んこうひ中るおじつよみとくらうくそて
しりのとと出わうとさ会すかうくうつ泣ぐ
しとそぐさよぶつひてのどやうよ尼恵さ
らもくる我さをとまへしうふひさいは傍訓
ぞ出きさよ。くうれゆくうらやつまでく
ひあうようくじ。ふうとうさてしゞもとゝき
きうせあうふとみよをなすぐらとおしるゞ
とれつひそうしさまへうゝとゝ。られし
くと恵つうれと見のまそていけり順さけれ

縁あること之昇るで
仏をおこし八ぐむるう
まし身と出合てこれ
のことし。みち孟
三十二年までの事ぞ。ふきある
しありてみし身を捨さ
ら父母家の功徳ハ偏よ生
じさ身をうけ捨ぐさ
らひ八一日一夜の出家乃
功徳をもうけるを嬉
くおもふ事なのごとく
おいゆる人さる人を
孟出家して八竜女
発悔あること
世よ於ぐさ物とハおひけを
あらぬうそハのそのき
おまへての、まめとめでそ
みりきひるんとそのとき
こしつり我身をるしえる

あるしまて出て給ふ。これ人〳〵ども出よ所
まりねごとの風の音よこゑ人く心すぐ
さ川をてまぬをと。ちぐしのくしくでの海へ
めでたくなりかひかれとふのを言てつる
出身よかくあれさをまてのうりかりらは
世のもをとつまこゝろ世給ひ人とするぞお
いゆゝろ人さるよ。御申はらござらうとも
ひとそとしれで。いとゝうすくきわざうり候と
いひあへるもれど。なをさて今八心やも
くまし。世よ於ぐさ物とはおうけぞなり
ぬるくもいつしめでとさとられともるの
のあくさくららぞ出給けり。つとめてさん

よおりの我物ともり
しこそ我身のつとめよかめて
さられとも我世のの心
はうらねうらの事習の道
みなどれさるやう 御髪を
そのことろをへしてぞれ念
むつしさるともいとそ
つらうん人もある
不請のこゝさすくて
うみ人もれとし
あうりくてりうさ人
さ人 三年よ背する
とうくにそん人も我
とく
さけざるゝ
二 無極の鼓人とく

さすがに人のゆきあぬしられバうくり
らん。ほとゝぎすもいとゝろぐしくみ
のもそのみはよほどれたるやよ。
あぢけなくも人ぞうれさるとむつしき
しも共はいそぞつらうん人もされとおる
ござよつけそことつてましぞくぎう
しまてかるもぞ心よこし紙人につひつ
みんじよのくゝりもちらざるよるらぐし
うしね身をまつくるかうしくつる
づさん人なるせればこそ硯よむかひて
なあるめりかはじめまるくひとのこさ
けるとしいかさつけ給

るゝ物よ　細 身を捨るの
一生くらしも心ありへとも
うき物よとおもひ捨るゆへ
孟 ゆくしもの捨る身と又
物事あられぬ人なる身を
今の事とは身の我身を
捨ららしおもへきへとも
おもひ捨らるへし
うきりそこし　孟 毒有
あすしらとよしまゝの
しけくゝの衣を人ぬ影
あるべしされぐ共に身を
ぢのるとし詞あるらう
が表るらく
うらしこぞ　三 中将
の方へは身の尾よなり
ときさとりく

浮舟 すくくのは身をとも思へとも思ひそて
てし世をぞことしよもそつへ身はりくて
うきりつゝぞりしさらきても代ゞりう
いつしく表しを給
浮舟 うきりぞしおひおりめし世中を思ひ
（細 同心なり云々）とそひさわりあ世のすぢのこしとどろ
くりきすゝひぬまゝるよ中将の文あり。
（かね尾のんて）物きはげしくわられさうこうらしあへる
ほどみくうくうことかたどいひくゞり。（孟 中将）
（細 誤ひやりしし）
（のんて）あへすしあつさくうらへもかりらへ
すりあれいてきさつへととあそめぢ
しあひらすりしすりさそしもあへるよ
こさうされ。つしゆりしくそしうとの経
と。うしりよるをよもしひと歌あらしひ
しうぐいきるんうしんありよとつひしりのと
（工夫わまえせんとお前の尾のつゐしまへし）
とつてとらおしくそ。さうそうそえん
こゝうすきへ
書 そしとゝもくこゝそるらん我身よ
のりそれ。どとてそあるん。例あれくりと
ろくさ給。のり表なおおらよ。今つとも
（身の心にて）（中将の心を推量）
わとも表ろ物うしいうて世わさるしんいと
（まこて表しいひまうて）
らうきりのてしよ
身まし うつてそうきせのこゝとろうらんぐ
も事もきてぬあまのうき本と。例のは身を

それるま世よことひとよ
もひきしひ　久人
ま中将のお将尾をりに
いろきひしするべし
あへりるみきこえ
御中将の文の詞しこと
なりらとまつけそう
なり
まことそく　細 此世を
く愚按は身のお気し
まと思ひこよ中将にもま
ん世をと捨んとりけるる
らとく
例あらしもとりて
孟 後よありまへ中将
の文と仰くえんのて（嘆）
今いとなるよ表るうれ
しく　中将の心を推して
表しおひまうく中将の
身を思ひをこしもべし
ひしとこいとおあらんも
まそうは表ハなよ物うう

ともかくもひろうさとうろうとよてゆから細にござし
いへくらゐまらせんとハ　然り厄介しあくりしとよあり
にてそ　細うき木八舟より世を捨てられて男木まゝくて世とハ捨られぬ程堂
かしこく
てらそそそそまうり
まつりまゐらすべきにを
包て中将の御まへか待
のまゝ　し

どのれハ世に侍らんと
お尾花のゆ来こう
ことそあし

（尾花の白羊ちそちそまる）
よしみえるをつくるくそしずうるゝめしてこそ
並まんて とのさまへど。あわくらきることゝなび侍り
（三の御尾形）
かんとそやうれ。（細中納言のうへ）せつうしさみもつらう
とをくれしうなんめかしうろ。（孟てうせうら尾花）御まうこで
のひとくうりまて（孟浮舟の仰かとく）せつさうぎ御しらうくの
（細尾花の御之 孟仙家の男ませハそめてやみえ）
なしうら男まそいもく御んきしえんしそ
とおひらす侍れどのうりそりの仰男を
いそぞへ治るむしをさん。どのれま世よ侍
らんしがよおそとも志うごきさにいう
じうしろやうくうとさきしそまうんとよ

仏にまいのり　孟　仙洞よ
も浮舟の仰ぞのしめに
まつりしとく

いと物えんなかくみてかりて
ゐるつらうきほんなれとも
くなくぬるのことるを
仰物えんらうさ出るくは
いひるがうるを。出家の仰
ぞたゞくのまつりハまる
ともかう

うびよせまへてそそ。仏にも祈りまつれ
おうまろびつゝ。つくづくげよ世の人
（細む表之 孟 宮母ごてもなるよ歎きまへく）
あかも。海ゝくのあやのやぐそうしゝうる花
（細白之やうく）物しおおまりびゝ治りん物ゝどもうるぞま
（まう尾花のうへ）川のしふしうりうれ。いのつゝへもとごく
まむきぬまゝるき海。のしまくくらうげ
（細 尾花の猫へ）うれハつゝのそふろくぞおりしけらつく
きほんなれとおくしくれそのことくなし
（孟 小褂）いそぎ。御みびめへてるまれふくしとなれた。
（孟 袈裟）こうらさげさるなどらしらうかへくでことら
うろかえとなびるせそしてせそんよつけても。
（くこのうへ）ひとなかしぞ。られしき山里のひとりと明

けふみでしものひしもなく
三 僧都みづからは法
師おもじと才子どもの
なしと云くとぞ 思案 あ
よ下を法師の代僧都を
いうせまうで八まうしや
よそこをのふこてひこさひ
めし侍しるとのひしるす
るべし
僧都も地もろしとそれを法
のべさせまよ 僧都の法経ハ
あれど経法物のけ気なふ
やふかんとそ法依法と
のへおこるかせまうて
思ふかくまもつひさう
しまうんハ 孟一品宮の
法師よ経衆さうし人の
法経されハやまさむしく

それをそまかりつる地とくらかし犯さむ
孟 御衣よ毛よすのみしとも
れしおもくしげりつゝ僧都をもうくしもせ
十二文し
ありかるよ示しものはなるやうにげなる様でしる
みゆ
僧都の俗中よ経うしもあるなるく
おしもとなくいらぎらゆきことを示しをあり
でなくもうせ経よやれハいふくいとさ
くしきりのよいひのもちすぢうも地なる
僧都のゝ
ここそ法ぎ法のべさせまへハとみにもえ
ありつでさうしひ経よ宿るかどもあり
孟 親居の侍とそて経まゐを
てなやうる東つてしおほそうそい
二同よおうやく
を経思ひくさてひろうじもうし
国
ハられやまとこそすぐして法衆よ人むかる
めらくおさなき人もかるきかりよ

細 中宮の一品の宮のこと
地ろのし法経よかりつまりて背よりうつのまゝ世
細 中宮の御心之
経中みも、このたびなんいとゞ後の世もうく
くるそことも、このひとさこともりをわるなど
細 僧都の詞
の経いもゝ世中よ久ちく侍らずと見さ海よ
備るとももとへまゐることも侍らぬよ
こともいわんるしかるさやうよるみ侍る
れんじ
れバ何とけとせざれるく念じつとめ侍る
孟 山籠を作せおりて退出とし
んとそ、ふかくこもり侍るを、うら修こもおて
中宮の御心のふ
まかりいく侍みしるなどけいしのふ流れのく
るゝ気
けのおこりわくさこと、さ海くよる侍りが地そく
細 希有 御うれうる之僧の細之
うしさこしるなどの経つかくよ、いとあやしき
やまし
くけうのことどもんをなへし、此三月なり。

いよくのちの世もうぐこ
そとし 師 僧都の御世乃
御念のよふときに未来
もよいのかしこ御心はす
とかくし
いとあやしう 細 僧都
うきふねをえうけし
御めのまゝとをのうりまつり

あのうけうらしくしく
花と 孟子曰男女授
けしとも出産の始ま
りき或ハまよりに
幽し曜

年老て行き母の乳あてゝあひをいふまうてく
待しうへさの中やどりよ宇治の地と云ひ
待ち雨よまちらやどらしとかくのごとくひ
ともまでとしつあら犬ある所ハあらぬ
此うあしはなりひとつゝてとりさ病着のさ
め系しきつことごとりやと云め人しもあらく
とそのこうけうらしことだをとさろの空
給げよいとめづらしるからぬ そぢくさ
かしぬんゝこされのいひうを招そうくれ
かうれておどろきさせ給おあのうくらひ給
華桐のさまうしもこのゝとさし分りおり
りきせ給んつじてなりよとくもこうりうでもうづ
（若うらとけてねきやしかるゝ）（こきせまかへいかくねいりてさびさせとと）（中宮の）

おもしろき世をうつるほかうかれと
あ中宮の御気色をいう
がごく僧都の云ひて香も
申さぬし

うせかし女ごのあうりふと
云ひまうらふ 宇治十帖
浮舟とはひろひうきうこ
びしるなり
しくなりまされどうらうこ
作らなり 師手習を
の尾上歟し後僧都ハ
まさ小野の尾ゝり八對面

とぶらさせまゐる所そしきことところとしなりこさ
こともりしてくりりと云ひてらせらしくもそ（孟浩然）
のほどのこともばいびひさし川も女人この
（ときうして僧都の妹之）まびまうり出待つるさかりよ小野よ給
予おまどさとおひ帚ひ給しんとてかうらう
まうりしまかなく出家のこころざし（おとけ 御弟子出家のおい）
あるさかしわんごろまうつるひ給しるがう
しらせんし給りふさゐるようしがいかうこと
（御小野と尾の上の誰うとをふ）故浮舟のこのめよ給し尾るんとをかし
（そんな比中将のことの宮尾上のひまのめ）女ごのそうぶと云ひてあびひ給りてもい
がんまいさうりしつさ給りとそくなりよ
されどもして給るかりけうそのさうらいと

あらじ僧都などいふまじや。

小宰相の君をとふ　三ちと物いひ合せたる事ありて此宰相君よく聞てしりて薫へ告げ給ふ事也

よくしらぬさりや　細　僧都の御こと宰相が御まへ今は忘られぬらんといひしにさりやあるらんとこそ人まねて

あまうの中より　孟　僧都の御弟子の尼の事也

師弟女房ほの御心あしも

おれども中人の女ながらも

まださうに侍らざるも

あらばこそ

うちへしくけうらなるをところなひやつれたらんをいとほしげなる人侍しるまびとまうけあらんと推し量りて僧都まてかうり侍ぐけりまへばいかくさる事なりあさらへとけとらうくいさうんぎらうと今はおぼえ（小宰相詞）らえん、さうとぞいふまへ今は忘れ（浮舟の事也）ぬらんなどぞ此宰相の君をぞもふ、思ひむすさりやとひ給へる人ならんよまなしよやむ（孟　僧都詞）（孟　さる人のありしよ）つくるぞきこえんさまも（細　きこえんさまも田舎人の事ありとこそ）さうらへ。ありがたくれも侍らじとやおりかくれも（細　さうらへ田舎人の中に）中べのしをめぐさうき御しうらそこそら。此の中より出給へれ給ひをは（なりなんか）そ侍しかどもんそはつきさる御ふんまん侍りらるわどうさて給ひ

人はうちのの人、（細　愍・愚癡・驕の人。驕慢・諸邪見等能忍不動是名法忍）名義集二　鬘揔表宗六　云

怒・厚・瞋・恚・憂・愁・疑・嫉・欲・憍・慢・諸邪見等能忍不動是名法忍

人ならん身の怠らずまうでこそ所はうちぞかうの菜まへてはまた形をせらんとこそ

そのいのちにさうり　細　浮舟の事申すべしと中宮のおほいまうけまくしもおうぬるきざちるさる人もあるやうにはせむけて　師　浮舟の身にらうけぬ歎かうの由もおりぬて　まそかすむけいひて浮舟のよふるあつかまさぬ隠し給ふを浮舟給ひてらしらうえじめてうつの御話あやしく思しさまをするれば中宮に摘説申さると僧都の思ひてとく

まら御ありよさまうまきそれ（眠　中宮のお心かに）いか僧都のくる由弟子かいなるかれなふ事和もそこそに了し人よくうらねし

あらのまうりまいらてうとみせらんひとりぐ（眠　小宰相の君）ゆがりいかでこのほどまかる人もあるかこのつゝらまあやしうて（儀　なうせしと浮舟のまをききて）そうとはさくどうきられはそれりやあらんとは思ひそれどさ（まうるはまさためのうたと）さめるうきしるなり。僧都を見ぐうら人世まる（孟　浮舟の事人へ）（それも小宰相の君の申し）おくれじとすとしく りのとゝも思ふれじとよくもあらぬうさきさぶらふる人をあやうまゐむけて。う（浮舟の）うし思ひ侍るとて。この御物のあやしそれ（僧都の思ひするを小宰相が物しらで）ばかりつ侍るなりとうの御かくもてかくしこさ（孟　此の中将の道）はれなびともふをくしもでごやはそれみえ（孟　浮舟の）

ゑハ一たん命もすてゝあれ
師ゆりくわりのうらみ
ひ一へはやあかりん
きうせらやと小宰相
よ保らるゝし
二ゝめてさあらんとも志く
思ひなげし　随よ治定し
くしそ渡母あらんとも志
らむくるかしくと中家のとき
ころうしけるゝ人なり
お葉のすゑ明石中家
の浜ん云小宰相よい作
ぞくれてしも直よハえの事
まかわぬし
の語ひもあり　に
お尼公の御かんを
出ちて談合あるべき
こと

こそあれ花の縁よきうとなかやとこの人まで
の絡ひすれど、いづうさみもうくちぐことを
さがめくさるゝんともよろしくかつうしんち
つげる人ようらむの結えあんも深く
ましく中がりてやことよなり婚家ところ
あそてさせかてそう川ものがりぬがしこま
うらあくれバうしくろこそてろうく
あつ比が結まてつこりえねづきことの結
ひをおいとびろりよけることうんいとあ
やおききどのあくどくひるすい海つくだれ
ところひと一のへ光るうちうきさめる
きせるりけりるさ物よみかりしらうるを

くろうさ物よ　細　もそ
まさう流うそつきあんと
うひし御引きれバうき
物まそひろうしあふたろう
こと
いところしく　暁　手習意の
世のことりをそとり結
ふとえどとところしく
も結んむやさしきこと
あそうもそ物さぬ　細　傍輩衆
布施まとりかへる物ども
うろ人へし　お　女一家よりろ
出布施物く
世ろんの業花よ　ねがひまれ
りうくさうろん　世俗にま
ぶりて世の業花を親ふ
わどハさ知ぐよ付て身も様
ぐてく張もおかれど　へば　仏どう
やうの外よりそこ身を積ゐひ
てこゝりしこてるゆを何も
あはしとなり
いのちハ世のうきくさ
細　淺圓妄影色妙花ノ
命ハ如露とて君恩の
うえくさことにいるを
秘密のみことよとりあ

こじりなうれ身をやしとの結ふも、いとと
づしくちろん御かりしそろ流わりつくあくう
しろしあくとそおやうこそ袖さぬるどご露
ないさき結ぞすよりしづ作らんなきうりは深う
うすつりろん身よつかりしきづくへき流
ねるさ世よ御ひ出くどもんの業花よねが
ひまれえくくぐりろん高ちてまそてがてく
我をひとしも御むなきへうあつことおあのうろ
妹の中よどころひつとめ縁ちん身ハ何ぞす
つかうらめ差くもえぐりしくも御むもえへき
これあらん命えし紫のうもそぐさくしと思
あらきそて松門よ曉いさつきて月雛細も

てりかゝる妙あり
松門に暁けりて　細 陵園妾の陵を書けりくはしく琵琶の事をあらはしたる故也
事とも　同 松門暁到月徘徊栢城尽日風蕭瑟　孟 されバくはしく月のあかゝりてつらへしくへ
陵園妾ハ宮女なるかしら君恩みもあつくもてつおはせ陵園の女となりてつらへしくへ
手習君の出家に侍るかに似たり　哢 凡陵園妾とハ唐の帝王崩ぜし時其陵の守となる
に宮仕の宮女を遣して守らせしむるを云也 從以白氏文集ニ勘之　三 松門ハ松の生ひたる所なり
門なるへし

と法師なれどいとよしよししくはづかしげ
なるさまにみゆるのちに 細 手習のこと
ひとりせ給ひけるてねさうふなびけも
をりにつけて風のおとをいとあはれにきこゆる
いとさ山ぶしハかゝる日ぞ
なるかしとやきてさうしやなる
しぞうしこそりまどかぬ徹なりけり
まとさうのゝにゝきうぶてきれ
さるかたハなれぬしめぎりしく

名ハひねもすなる山の
ことも　孟 栢城尽日
風ー
山ぶしハ　細 山伏の身なれば
しき嵐とも何とも思はず
おもしさを云ふそまゞき
しもじも思も栢城終日
風葉飛の心にて此比京
陵園妾の泪なり
なり
我も今ハ　細 手習の心にて
といふる泪とて侍従いふや
ふはらうにありしぬ風なり　細 侍従ハきけそれ
のよりてもかとおもてもなし

ん山ぶしのまぶる風も、あるまそみた
山のかなる人あつとても
ひとの山のかなる人も　　きこて 雲母
沢八十あすぐうらハおいぶ
世のたよりなかれなりとも

ひあきるすもいえんきそ
手習君の尼よするしう
らそなゝもいそんとて中将の
おもしうるともしく
紅葉のいとのをもしろく
尼君の琵琶のおもうの餐
ろうり
うちいて 細 わさくしゞけるつ
人を
おもてて曲をおもふをもず
手習の君のやうなる人
ある(で)ともし師 手習

まことあぢきなくて西山へのがれ人かうりきを
てともさくのかはりよりひともいと
むきかたりくる谷 孟 黒谷 叡山よあり ふたきうらあ
まく法しのあとはしまれてハさきりをぞ
倒のをぞくさをつけうさいおいかすくめづく　よりの倍術を一府ふうりとも手習君の心也
しきよこれ根をびし中将うなりうら
中将ハ　ひろさうとをいさんとそりよしうろ
と紅葉のいとしうてかのくれなるよ
深きしう冬てすれバ入うさうとそ揚表　中将の心也
（細 師尚説）
すりきてこてよいくふうらしげなる人を
こうけふうはあやおつてぞみかゆへきさみそ

是の也もひて尾よるゝり
さまつるとあかく〳〵し
白雪春の尾よあり云る
すみハおなでよ心ハるゝ
人どゑ楮ろうぞあやし
く面白きらんとし
根さらそり藤ねも杏べき
日野春ハ尾よ数多ハ宗
さん、みなれども紅葉も
西田ゝ不るれバとし
一 の 細 白雪とさ
かんぜ人ハされど心いしん
法そくし 孟 今此済再
を出家しられハ中ねを
とくめんやくもあさと
尾上の寿し
あらんもおくし 孟 寿よ
ことろうすし 仍今も
まんとハ世りねどを
まくのんそてまろき
字とし

孟中が羽也
せうくいさ衛ありてつれぐわらゝんくゑ給
紅葉もいろよ奥おもんとてみやうしとて
ぶふ紅葉もつまなとやまてるん。自然しまのつ粒立人
ひなくれどもよとし
つき猿のもさ川べきまのりよよてゝ也そ。
と出しまうちかま春れいのすゞくりろ
みつく
尾春
秋かしのあさかし山のふりとみ佳さ
くるべきうげらぞあすさしのあへと
孟
すけ人よあらじとそよやま里风しも春
どうするぞすさらゞいふうひあさんの
三 白雪春のこるく
清とはあをつきをぎのあそてき海うそう
あらんさ衛と。いさくらこせあ人うとかねのあま
おまさべうんおふとびしきうしにせうとく
まび終それどする襲しまうしよをとう

うそうまびいろの
三 らきずきいろん 如よ
君のむすろうろ
みれんけうなりしるそさらろ
花 萱草色ハ柑子色さ
大暑ゑまじずかわるゝを
うさをられてをむうらく
いろへのあゆさ 細 紫のそ
ぐれく すその ひろごり
さらとりめあり 孟 紫の
もとそのてらくらどりうさ
紫よ例せうち色扇よ
有三重五重 之く 悪に
三 桧扇をうをやまよ
てつむをあつの 五 重
あるく

かね尾の済再よし
とあまハいろてうろまぺしゝさろ人あるそせ
まほしさ海しでぞゆさすあうまを
すびあのあやなりみはくらんぶうきみせそ
三 萱草色
うらこちをしてをいさきやきよやをびい
おうしく今めさきうろくなうなはあへの
あつざをひろげさちやうぬてちうぞき
すあつきたりゝ海のよらくうきありや
うのけちうといつくぐさんやうにあ
く白ひなりぞてろひかるとぞあ給もちぞ
三 白雪春也
ぞゑちうさ本帷よからけて給う
うろをいれくうきまへろさ海ぶよもて
おかね尾つくし
ゆりしゝうにとり衛のとろぐめさきぞ

さ　しのびけるのゝもとへ
わきまへある
主　引手の売れ

かたきるんおやまちの
やくしま　孟中将まうし
御家をまさせうちてとい
ふらし　主　手管を中将
のまうすとすゝきをいふ
うゝのおやまちのあるよ
ぶ
城梅まちし
ものるわきこけつひきさえ
えねべきれハのきね
お中将の売ちらのぎゝき
てうつまるもあんねまなの
まさしれめんしきんざれ主

からあつとどまつくらけ給ちん男いら
お中将のゆを案させく
こゝにてそまゝり給ふんとゝてさんべされ
つまりやおりきんさうしのうおびのを
ともおきくらあれをなし　孟中将まへ
へぐくさうらう
えんまくへさ孟し〳〵し川やうまうらいらしくさ
自らをらくんぞ替させく　師中将の仰　主中将の
ちすしそまさしいちしくめすふさ海やり
ねろ人へとしけがちてくらんおやまうの
うまおりしきらやしくめしくれバ川く
まとあんへぞ柏ぐらくしさけらひきん
しさ自らの仰さえんるぞ主のきし　細中将の言　思中将の言
えねへられハのきぬぐぐらのき海しさ
まさそのんのへんのんハりむとあるんり主とそ
ぶんとうちひそきぐるめぬんへおかれんや

のさくらうちやう
そのんかのへんれむまきあ
あそぞぐのうちもさ
ぶ人のさせきらぶ油治
のかるべきことゝゆぐ
まるやふ中将のゆし

まつまれ海まハおりして
るりとる
さのなつびへきまつ
まわらともあるべし。尽まなの
もりハなきのむつびぞもう
ハらせしくびぎるうゝま
君ありしあへとし屍まらり
中将の御しく

まさ今ひとりあらしとをたへて
師中将の少方と志れ

らびつくれおうらわりしハ柏さんじ共くば世をと
そむきるまけらるどとのぞうつくれるる
べきぬるどおやぶくんそえるあまうり
ともうくらき海しきりん人ハぶきそとお
ぶしぶどでく中くえかまうりてんぐら
しろへきとどきのびさうきゆよ柏まうる
のつぬのき海ゆハ御りしちくぐゆうこともあ
細中将の白
ひとりてんとそへでるのおやうちよにうらふぬ
まゝろんどうゝき海よ細ふよぶなろんふや
まくさてつべくらん侍らさやうかまとし
細左将志のまうれりそそみとうし
へまりまんぶうしうらさりまされがらくてぎやうに
まうりゝるまゆきる今ひとりぬきうしとをたえへ

ぞせてくまうらうへよ
丹後へのかざしとも云て
こそいふくらへも事ある
いとめずらんかりそく
抄 丹後のみきに尾上の
末の経らんと焼く也
まめやらなうさ面よゆかり
ここそれをて 中将の文今
一つかうしをそへてこそ
とそつるよそへちる尾
上の細と
このおまえもしらるれぬ
へするらんしー
孟氏姫君も尾上とよ
そうらぬへとそてらう
とて中将のおやしく
なかし
さるのなのゆかりつらさ
にあてるへさるよハ
孟それよいづるのども
前かへかのあしハゆかり

てこそるどの給。【細 尾上の句 丹後のうすそとそえ 孟日】いとくりもち息ながめそく
しろめぐさる檍のゆめのよまめや
うおするさ面よゆかりしきれどもらと給
れん。いとしうれしくこそ思ひまへとらめ侍る【私花ぬよ】
ちり ざらん後ちん表よゆかりひのをつらんべきと
こなさ給よ。【孟 中将の心こ】このあまぎみともられぬ令
出べしられおらんとかくがらしりも息【細 中将の自之】
のおうしろこハ【抄 中将の命のうへく】いのちもおうがらく。さの
りげるさ身をれどささてさてそめ侍る
べきらにうら侍りじ。ずる心やし。まへき
人ハまことよりの給ちぬかさを命の
こしのゆかりつるよちるらん。べくらべさ、

うらんとらしめさらの
ゆかびづらくといひす
られバ前のへおりそそも
ならくぬるすられども
今おもしろごさ面そ世
まへすゞ 抄 いのるの
の女此形してお世ハ前の
人もあるべしく出家
志すへバさやうすもおぼ
みたらしうらぬるすと
つなかし
大うくの 細 此物語しりハ
前身をいとひ
うくふむさのするとえハ
前身もうちめしさとえ
わ よおつく実し給
おみのあるど
お武消息の使の中将の
わんどうちさ面をとらう
し。ゆくす前とうらえん
まどまでそうらすぬ心

とらめは侍らしのどかすとへぞそておくつら
し侍るべきとの給へバ【細 尾上の詞之】人よ声ぐらべききさ
面そて世まへ給つでさりやしづるいづうひ
ともおもんほかうくらるよ【細 後世の】出ひつざ
すつおりき面よるらん。【丹後の心】こうろのゆかりむけ
をさのこうて侍るとるどもうりい給へる【細 丹後】
さうふもしをきくそこしまうら【尾の身へ中将の世うそこし】
【中将】地侍るこの世をそむさげる更すれどハ
そふよもそて身こそつうられ。のんびうり
めつゆの給しとのどいひつさふるらら【抄 中将の】
うくとゆかりるをさうつまさ世の面流【丹後を使の之】
どもゆめてるすさりんるじいひつぐこ

こゝろからうらんは袍ごろう
芳宜 翁 白露の大くさよ
あへしらひまで翔之句
さ身とらし

枯木などのやうよ 如庚
枯木のことくなりて形ハ
しとし 可 荘子曰形固
可使如槁木
ひきかれりのをのとかめ
しらりしと
翁 出家せざりし頭ハ
まご身とあやうく白髪
のそひしが尾よありて
ハ心の生りてやもれ
ぐしきとく

白露君乃句之
こゝうらんは袍落みごしこうてもらくくまで
あくぬこそくらかしかれとつてにてこゝろ
師中納の句のまし
いよつけさらつへハ志落りぎらしる 細 白露君の句之
師白露のまし
あさましきしをきし身あれバいとう
とめしもくくらまるまじのやうかくん
よろすそられてやこゝろむしとりて句 止
地
ふされバ月ごろ希さるくむとおがれりの
そのとめがしきらしこれ目いの 孟 出家して白露の心ごろ
ろきとし
あそのちしらすとてもれくちとくするも
尾ぎとつるくさゝれる志ろうし 基
うらみごしてぞあしくらしつとこゑひ
ともいしくしえそ法華経ハさうしう

かうん
法文あるごといつ出かくしまくまの露 細
田向露の落てつれる
山里ハ住人さへや花ハ
とめらん 古今 此寄
引ても落花
つろりんめくくる比ぞげよとやうらしとる 細 叢六七第之
りりなくとしきらぬ書の志るしとそ
どこひりまれるめのそとしきぬきく 細 白の事 峰の書のまし
ろがるくて落よそかげふゝのの落しくハ
仏ふしきひそてかうれどる花その刻り
あどのしは忘れど
白露
うさんくとを暗山のゆきことろのてとふ
置よしとぞ今を出て花おく剣のすぐさ
めの白露を 秒 そうるひのひまハ[illegible]落を
れ世よすくて年へざらめうを[illegible]
吉 おくんしるみど[illegible]何まげ[illegible]

[illegible]ゆひやうとくおりれ
細 田向露の落てつれる
山里ハ住人さへや花ハ
とめらん 古今 此寄
引ても落花
うきつくを 細 落句生
しそ
剣のきくきみれ白露ひ
と 孟 白露ひとは句
そまそあてく

とうそうなうこゝろ
三 [illegible]薄へそよう
なうく
此ころの 細 那古と称
よろこ 孟 浩然の如は
さまうのるしく

雲かゝる 細 尼崖の[illegible]
びうふしと[illegible]
三 [illegible]つひす八浩八景
と称し子ハ秋と称して
興とのぞく人もつひこ
とくは[illegible]八尼崖の
かよ八称せん人すー
とし

まやむしの 浩 月やお
らぬまやむうしの書
らん
あるうし 細 蕉そそ
も白そもこ 浩 あるさ

すさそうそうるつこまられて人のりそう
うりもうとおもま見えて 蕉
尼崖 山里の雪まのもられつゝそやしれ如ひ
花のられまう ふしそ こゝろまうてま 島蕉つし
つりえうなんべ
島蕉 雪かゝる谷への見られも今うらいとみか
よあいくぞ年もうむべきとあうとそそて笑 浩 貞享の心中
を橡なら尼崖のらえ
そんと衣あうふも 孟浩然の尼うそうぞうて ひまんべきなさ海
とさうしくづしまめやうまお折なら給ひや
のつまくそさ紅梅の色をとうとそうくぬどま
やまのとうし花ちるも見よらうせのあ
いあり 浩 ゆかりしめかひのらくまきうわ。浩

ふ梅の配とそげきいお
つる 孟 三 こゝし花より
梅のられむうりしきは蕉
などまやひたそうる配
てうま[illegible]のそうらうとあ
ひたうまり
神かれし 孟 浩然の奇と
うさよくしるうるま[illegible]し
お 蕉うるべし白まそもこ
べし 蕉葉おまふ小将乃
色をさめしに奨おひし
とおぞそかうしと尚すを
んてこゝろうくおさまる
るんらうそそうでめうりう
もさきおうくしものぞやうに
梅しうひし人ハびおふおお
なぞとひおうでそこゝろうり
れうるくあれハ蕉の[illegible]
がいへあるさ 孟 大尼の[illegible]
てうひうけまでむしもてめ
の言まそてるし 乖
のうりるうさ[illegible]ゐと
お 大尼の鎗令いくうく
そあうぬと紀国まぞと

秋よおりそて まつらを 浩 下らうの尼乃
もうしつくさうあうめし出く 花 ようとれ
いふしとう海にくちうるよいらくうかひられ 師
神かれしひとうそこえ 荻のうれれう 文吾尼
とまりふ雲の明かの出月おまでのむまぞ 二条園
の紀寺なりきうゝ叶しらのかりてまうう 為家
三十ちうらめくびうらこゝうけま明そて
うるうさ海しうりふおよしとうつてそ 地くし 細尼
みどそうまかげくしこゝうら海おすれいでうする お大尼の
よこそいくこゝうすくそそひぞく給よ[illegible] 紀有伯
あうれみも[illegible]うらのうるうさ渡さ海を
こゝうそまけなゝとうくてくとこさ月ど

つぶりてんをまくねこ
ことゞいふ
ひさごの七の苗とし　細 范宣
の従母の母とあり。み
な荒は西府の庚蔭と
しるし所紀るがいを
うとみり筋見の書
み母のゆりいわかそ

元ちら付　細 太尾荒二
ものか先老あらるとし
盃年よくれられば此
尾五は孝蔭の外方を詣
みけぶくしとて

しうしくのゝ待らようか
らひてたん　お国よりの
るまど紀伝るがいつ

まとし月とゐり給ふは母やうらかし給
いぐ様は一不とゝそれいらにそむきて
給つれ。孝陸のみのごゝいとこしづれゆゑ給
ふやうのいりうとあるべし。されど月よそ
へてはつれくよあらはれあらじのさまなら
てるん。ひさらはいしくへとゞつれゆゑ
給つさあり。えまなつひ給まじきさ闇り
うんとしのふのまよ。けがわやの荒とあい
なすそくとまれらよ。ゆきさいみやさからの
がりて日ごろよわり給わりよ母田やけぶるの
いとあびくむつうしくのゝ待ようつぐんひ
てらん。唯日もとさうりうんしともへしたき。
おたねどの。守治よ助そもし顕にとこ。いつ

あるがくとよの女乃さなう
ぞく　お 紀侍ろうづく
ふ哥とも女の信抄忠は法
もうの附布施物の料
一ちぶらてくし
お一飯個まゐらう。愛飲
よ弥付る年くし此紀侍ろ
も叢の家へかるやし

うまつりて。扨八文のたとゝ給し不よ助とそ
しとく日暮し給し。扨文のかれむとどめてはう
しひ給しを。尭一としてわいとしせし給まゑ。
そのかれおとらうしゆくさ再びしてまへてそまり
つまあつられるをもうしその義又ふとゑ給よそれども
そのかれくそしのわざをそ世給りんとしうの昔
のつもしかるんざるべきゝしとの給ひとそてみる
しきよの女乃ひさうしぞくひとぐぶりてかしじ
給るべさゝきとをせ給てんや。いどうかなべきもの
いりそごとをせ給りるんといつぎさなくよ
いすぐうの義あらけじん。へやあやしところ

とつまりしうそたくまむかひてゐまつりおま
細八こゑこ
恙めのひぢりのみこの清心をそめいふてうと
お中恙のてまし
なうしきを、芸つ山のとやのかれいとさいいづれぞ
白し
孟尾又の同称れハ紀伊高おりのまゝにそれくしうき
らのまへぞごこのとお殿のれのちれいをとうり
菫めとらそうま王あひてう世うつと歌つてまし
だうしわうえしじとしくまうくをうそるし給
細女家
いざり出るとハうしくるすひ給すうえ
細女家のそし
じめのりさいうじうらさおぢらくすけを
し給つべうりさうしまでじうどうのとろう
のしうこひとろりけうとこうめをきみすぢ
細
紀伊守
おそろしおやしくやうの物とん孟大恙もこれをと
細お有しやうの物とん
一旅升こく
もとうを給れんしと哺日まいとおびんま傷
きのよ
しれ川ちうてをー所つそてゐをのぶごうこのそし

うぢあのそこいぢうちさき
暁宗清の御父恙のうわ
わをいふ
らうしきけも王あつべう
孟瑞女家・菫の女家を
しまみづべうりしと有う
傷ろわうのるとあけま
さの恙は別給し附
のみをとうつて
みわろうの吉うしさ人
王
ありてこし
菫へ紀伊高うぢたに
きん有うをむろうしく
おそろしくとあて

うへのかり給うく
飛川の亀より殿のとり
のかうまうて
王人ハ 王 給弁の事を
ろぞうよ治定しそよ
とまうり
とおん給し
孟菫の事うにあそびし
てうくうなり
女のとくめでたくそま
つりぬべく
お恙ハ御別世有は女を
いふ
世中のいちの御手も
細 撰政関白とりつ孟給
撰関白とも何ともゆる
にて菫を偏よそふ
とえ恙よろうとる

細 紀伊守と恙ゑうひうくし
いろしくらまさ給さいふ人よのかりまんひそ 傷
かのさうけ給し
菫
さし人へうけもをかくねあのたまゆち
そふ歌いとぐをうきあへぞとなん傷しとうま
めしうしてのは給うしといよくまけ道とぞた
菫の
菫の父殿とりて
郎亀よいとをくるれよ海またんなりて
紀伊守うつと細 菫有へいろく菫を教論と
給し女いつぶくいでてもうらなうりぬべく
なん、ありく傷し附まうりいつりよおいつしまきと
菫のるよし
とよるよもとせ傷しそうじうごこの殿とその
うち
こうそしまつ志をめしうハ世中の一乃御
細 ミ乃恒
こ世のうでてなん尽し傷ぬうりとりうりへそて
紀伊高るとそうして
御
紀伊高るとそうして
のさ
まそうそさんなりかけたうりやうの人こうまは清

右の大臣殿とのゝ事ハ
花散里と此殿とハ
つれなくて相しあひ
つゝの事よ。此君とお
なとおもふ瀬づひく
あはれく深く　宿徳
孟　宿植徳本の心そ
法をとくなるべし
あの人も此世の事と思ひ
ゑんと　妙　祇園の上の事を
よそぢよ語らとあるく
手習の心をり此世の事
ともなひれぬし
わたりれぬもはらむてそのと
孟　紀伊守が語らとも
まひて業の末れ給ひぬ

あはれ海ハうらのよきうとおもふなを君
ひろ君とならてくれん。故院の御かた海
みはえなりしび給ひでしよみなゆかしぞうが海
の世よ。この御ぞしそめでくれ給ふ。たの
めり暮との給へがそれハうらをいつう
ろしうきうりよ。おもうとしてそはさ
かうき海ぞしまへる。思ひなくぞいでぞ
くかそするや。女ふうくあれつゝまうとて
やとるんめかし侍りなりども。さへえんやう
よいびつづく。義ふもかうしくうとて海
のんとこの世のしとれ思へしもぞそ海
ありころしくうつりとふをそしかぬもとれ

よしなきもは女君の心
とゞまりうつる　御方は
白氏の身ともこのなかに
それともぞ思ひはてゝ
何とも思ひもあらずみてなり
あの人乃思ひつけしうしな
ともそめつく
孟　おの御よ。あふかしと
女の仏しづく一ぞろ
すぢ仏はさす世給
ひてんと思ひつけります
おもくし。物を深あはし
て見るべし
物をとらへしくひねら
を見んハ　花　ゑひくん乃
思ひを仏なるを

給りぬしそりし義よおもつきもはく
君の御心の内をしらくくれども中くい
かうひるさ海をとくく中くて
いま後ハしつおしくぞあうけり。あくの
そひつけしことなるど深いふそまうよ
つけてもあやしくうつるこうちを
れどうけてもつひめそれど。ぞうちめひなど
もうを。うれれんじつれよ。物をいとう
つしくひならせまへいとしてぞうちさ乃
ひとへうそすろうと。うしそ物がゆれハぐら
ありそ。身をとみれど。よつまうりおきまく君
ゆそくしくをうらとそくづて御をなるて

それがねまさしくの
お布施の袈裟のころも
なりへし
おまへりハ おほきを
ゆるし

わが衣 細くるしき裳末を
みぐしのりしを出ひち
こと下の人は法の事を
もちるの園忌の紐
るすの袈裟されば出さ
をおひ出ぐくて衣る
がとこし 孟尼よなり
ふうかなれば袈裟
末をみぐくしひやた
のりんとし
いしおしくなく まずめん
孟俊のつま我子なり
て尼君のこころめ
にてふかく臨しると
おひあつんとし
そうけるこの 細 宗まそい
ここわのかりしうらとく

なげやうなれ給ふ紀の はなきらくのよなの
めしらさくされて御前はいうらとらしそ
きそまつしらへられおさまりさしもてと
ぞ然なりやとらふ人あり
わが衣それわ身にやあり世間さ
この袖をうけて世ざらじとくこそしられ
しぐなくまなりえんのちよ袖のく
れなき世たりなれば、さておつまをなげて
うとほしさまでうしけ分出やと
ちんなどこ痛くおへそさかるさ
のしはそてまされ給みしとうや
なりこしとかりはてよつけてしそれがの

孟母にりしうのしうゑは無
れ果てくるし浮舟の御
なり

うちくしるまのつりぬの色
お尼君をうれば、よのなる
の女のさうさくのきあひハ
よなれども

若の人わしきやりしらハ
浮舟の病人の心うく深
袖の色かへをもちれな
よつけてもよの姫わらぶ
く病ひもむすくなきわ
ひえもえりくしくるべ
き袖をこふみとし
う役いつこふうわらん
児 母の子をかりふなり
てなうさん人をさえりく
かりみてし 養某世生
あいぐよ母よささく
わ衆生りて
まるの父母の心を思ひ
孟生別よ行末にそこへ
父母のいでわらんとえ

なる衣なれと知れぬよなの給さ 細 尼君の御こと
かりし出りこし八身かりもんをつくさせて
へてぞ給しとてうちかれうこかはうつ
世のつね乃父おひずとひきもてよすれる
それいなよくしく侍よつけても若の
人あしもしくいなしとゆ出らぐりあなりあわ
ひこうし給ましひし世よおもすらん
やうくなりてこ侍ぶよる夜いづてま
こあらんぞことぶし弱う御酒もて出が
え侍りとめ来りてぞ忘りし給んぐ侍ら
んうしろのまへいいこし御どまでハひとらいを
のし給さこのつきばかりやし給かなるん

あく出ひ出つまつけて
おもひ出ればうそなれむ
まとゐねとも涙をそ
うちとし

かうぶりしたりしは
細 大略叙爵(じよしやく)とうくふ
事と云ふかくしされと叙
ハ五位の事也しも六位の
蔵人とくらう花寮
より而つかさのぞくにす
孟 将監が業のつひ
てにかりするて 愚按
かう右近将監かられハ右
近将監をうけゐるで
まよりくすけぜうさく
あれり近衛のつきは
右将をうくにし中少将
とすけし将監ハぜうっ
将曹とさうくんと云也
須とくのしらうと
符するもそらくもすま
よはきやうに人のそしきを
よろぼぬかんひくと蓋一
人の事かすもあらふと
うひもすくとし
所のきこゆ 細 大宰俗家から
ぜうかしがくし所従宇治く
通くそむもむべき所
あらうとくし 孟 そてかろ乃
さうすて宇治家のかう
きことありつしさひし
とくし
たんとことくもえく 孟 八条
の院給ます文殊をし
ゆへとも語とも 既

とて、涙のむせかへるをまぎらはして、あくに（呂室の御く）
出かはつけくこそ侍れバ、こそ、い
でれ、色ゝそむるよし、みかどのうち侍らん（つきせぬくしてまへる人のうれしさも見えて）
どうしどくおよの給へし、つ大殿 細三月の末つかた孟浮 はこのえ
の一周忌の事を叢の事終
てのまどさまにたちて絵 かそでつるす、ても中ゝ
ありけれとおもりはまかりなどはひらに風 孟浮
ども八ゆらしかりし八蔵人にならす（母の兄弟しても）
がたつるさのぞうもようさし などいとうら給
まれかいさらかなるよこそげたりをしち（小弟子）
くうしまうんとむかしうれう 細 其兄之
どうらくさかやうもち頼后の家にまで（右近中将へまゐり）
まうり
のうべれ中人のしやうかす目あくる給るを

六十六

とゆふしまめつくすよおやましと山里よ（孟 業之の御と）
をはようりかしひさ集へしも人の家まつり（今のそ…あれも世）
侍もさのべきよしそいおしめぐれども公の（の後ままとおもひしも）
わりきのとしいきるんあるとすまへあらしつ
我付どもそ給へ仕しと所のさうすやもしんす（孟）
くおまへまりかつ後ハ右もゆりけさ公
ちし給く、ひさしくのりし侍しあるまさら（細 淳母の）
ぐうぬのさうりよまうりてつきよ世の事（周忌まし）
猶あうたこてお主へしきまさうるひとかと
こまべくゆるのをとさきりろるひにれのを（細 ぐうのおかもうし）
くとるん世わしく侍しとしつ給ひようのしとお（細 伯外ならし）
かし出かくいうくかしけれバそこまかきに（右の中衆の御心）

こしらへさま 女太夫浮舟
のはしらをつくらこうり叔
ゑすに行くの結つて薫
の君結なり御方の侍
従のうこかとしすと薫へ
きかるふねがく
うせ給ふしき女きん お浮舟
の行来るすくみりしと思
ふべし
るをうく思ひつゝすらうと
細中君の事とあるれ無之
孟中君の御身様してそく
思まふすとなくおくつ
さうとおつれおもへぐとも
ろぐよ口つれかくさ
三薫のうく思ひまふすも
又白君の御すまいつけらく
もしひくらうすと中君
のゆかりしたおもてへのうちおん

それかもあらくさらん相母へ
御薫にゆ中君へ浮舟の
ことを語まよこへかるてそ
依頼の方をせ しくとかつ
えぞやとみかせとも
さまてもあつてんまうら
しらくいへ出るうてそ宮し
とし
薫をうしくとてあらせまう
細中君の小宰相よの語と
思よくやよしとくらを
薫の御よへしらし
さ海くおもう 細中君の御
御とし明宰相のまなうら
ろうくつかのあらう
いつかしさまり 三白君
のろうあり故にのうつひあり
と中君の御かの女りせてのまま
とか宰相やかてさん給さ
ねへし

きよのやまとのもりんげかうくらかりのひく
ん今くなりゆしくつをまみとうすきくら
つぎさらとみかりしらつとこそさしと待る
ん。さりの人ぐられさる所へよりつねのる
んれらぬをすまつきゆうどうらを待ち由さん
つとおやしく待りとてらそしらは中のし
結つぞうれく安からすらとふろおもうて
名りとも結んがいつしかしく身ぞされ家の
物とのまみかりて。そのひく病よすなりぬ
とみかりめをさすかなみも。ますずりよころぐ
しくてうるくよからられかくさん人のうん
しみかりしくめの小宰相よりものべしく給ひの

人のうしとをいて衣とそうへの結しようつとめ
うそともお出へんのしりどぞそれかもあらう
ざんりの御ゆへとつてまちくそるん。ざむぞ
こもぐとぞおてあをとをけりかくさむるとバくれし
しらうくしてざるこうもまんあくもちるお太
方の御結のつてくよ御意所のてりひしてとを
それとの結りてそれよつませまよを給そ
ん。こととおもしてこなんへいつくかしてこそ
之ふさすれど。こ海てくぞるこうとまいふそ。又丸へ
いつかしきてとぞその中やしの結り行るを。
ものえておりしとなりらとまつて病気申さし
しおもつなくよてひおもしらも見へてしたいなりや

あはれのみそ世をのかれし
まして 抄 薫の心を中宮
の御方まても給はるよしある
しもよくしるし
られしもたらへしめよりあ
つらしき御心のしそめさせし
給へる 作者のかりの心にて浮舟
の事を中宮にはかくし
おしられし御方まちまても
のまたせ給はしと
とかくとふくめ
人にはまてもしらぬを
此浮舟のことは姫中宮に今
口かしこくもねを堂て
此御よりは御心もあつけ
んとし
この人の 細 浮舟の人形
かまたのひかしこにて
さ給のことにも多く人
取あつかへしとし
草案しものつよの人にれ中
まりくもりかしきなり

しといふそくちをしかりける。孟 中宮の御
給しもおなさけ
さらに給はし。いかりてむつかしき御の此かしより
てあつらんかしの給ひて、くはしきと渡
らせれと、我はあるそしめつらん今しさ御の
こしめしてあるかはしかへしてのみとるを
のちかの 今 小宰相の浮舟の御事をさして
此とかしこきなかしても人まゐてかしき
ねとものしけのみはなくて中へくことわらん
かうつの人ての中まに。そのあつき。こうま
くれある世中かはるとまてつりて。この人ま 宰相の君
をきかんありしるとあわし給はんとは 細 薫の御こと
れくらとかさくらして。まとおやたてと
しんのことはみくもきこえくの人のありさま 似し

ああさ世をみましてかくやかの不思議のさまかくれかくれは中宮の御もとの宰
れもくいふなるんとし
これらみなさんなし
薫の口つくろひいひもむつかしき
おやしみかしきの人のつらさまそかしら
かくすありと思へるすとし
ほとらかしまで 孟 薫の
心し今給はたまはし
まそれるまれてあり
三 浮舟のうせ給し時
以下わ尚せなし

猶の宰相ちまつへし。此子ちかきもろれなき世とはいひながら
おし 小宰相 今宰相の物言は我をたしかなと侍りしく
これその人よ我あらんやとのさまへいひの 小宰相か
侍従のこもり出し日ちかき尼君すつらいこ 右内の浮舟の
しうまのひしき給ひてられ人かしこくて あさ
ぜつらしとさもしみのかいかうきうきをいひ 孟 浮舟の出家せしを侍従のかたりし
くちかりあれとも侍らりしといふ事をと 薫に
そうしぞそのころの御給はせこかいはゆら
まことに婦しまろれかはことよそれとこれ
ぬかうん。いとあさましかくらことさへさ 孟 薫の御推量に上臈まさなし
れいかそくいはまさるへきかりけらる

まそさるの給ひそ 細 白哀
哀れ中ろぬへ黄まいかう
そゝしすれしかりこと
三 白の乃かひあとして中
哀の秘作さらくしかとと
哀をうつりへ 細 白の着
あかくしさあくいれえ
一向よそうまうけて
ろべしとし 嘆 黄の哀
白哀のちをと黄君あ
うづひひ念ひぬてま
なふとをなさんへと哀
ありてすやむなんとと
孟曰
あらんうあけて 細 哀
哀の人うあけてとこ後

よづのあはれもかくるまじやとや人のいひなす
さんざうのくも出つけまいらんとは必ずやうげ
しかくいふりたる人ぞおほかりけるてんけり。
よそぢるの給ひそうとかへしときゝ給はれぞ
かや我かはさらにかんかへしきこえめぐる
しきしくかめりなきをみのかづらの給ひをねしけれや
かんぞもうしつゞひ給ふかくいふりしう表を
いやめかくもかくにやかで衣かし掃ふかする
てそやうちんをいふ人よりうて世の世すりは
黄泉の何とけいかせんをなをのつうう
うつひとなり風の中まされともありるん我独
よしうかしもじのかはいふつうしるとし思

しく前と一るすうくし死かつ人のつあのつひの人とらて
うつうつく 孟 黄泉也冥途の名也 三 今生をそ仏のかたかくへきれと来世をしらず
まじるとかん
死のしまつぞやわらん
三 中哀ハ又那ひとるを
をはりわかのまくまハ
ののかへしとさひみぞう
うきはみぞよ黄の
ゆまて

かとはかくこく
細 浄身の従一すり給ふう
花 浄身のかと身をもるぞん
とハよ身とみわし給ふ人
ののかやうふ掃よけいそ
れまうすんへさも給ふん
と黄の哀あらと

ごられく我の給ふはやあらんと如何あれ
とはかくさのゆりかれしはちなよさるべきつ
いかつうか如くぞけつ給ふあさかうう
てうしるひ給ぬとお給へし人世なみち
あられそくまやうよ人のゆかひ給しかれいう
でさうとハ給ふんまと給れしど。如そ如ゆう
れぞうかりそてもあみうくこらは給ひを
やとおもうう給ふ人のを給よ給れいへ人のう
さう給しやうかくいさへやうかりや給ふん
とよつうしくとあへしうてとて今すう
出てしおのみ哀の中しるかいとをうしけよ。

みつとせささらんと云
つかまつるへ
師まうさるんと云つけ
ましてへとへ叢のうゑ碧を
又弱きうると白の云つ
けあくつうべしとく
うくみするもをきくし
くとも
抄 白の詞ニ云句詰
でねる返ろやうに叢
さんやじくに来つしむぞ
なりまでみえんなどく
白のるとわのめつる
ること

さみだるゝ暇(いとま)さへ夜ふかくいひゐるし結ちぎりて、
浮舟の母之 あのこしあさきるんと云つけあくつるへかうるみ
白の之 よすきぐしくくも紫さされぬへしさくるよ
さそるうれをてるぞかそてるし約あへを
中文の詞也 けりしまへば、そ涙のうへちしまいと衲みもろ
孟秀也 しるらしあつことまてささくとくめるらし
白之 ことよこそ文いつぐつ山ノ結さんさそへん
細 白文のうちあさ
なあしきかるしき まさるらけりれ人の経りれときけばなう
めぐのうへうへそく てさてつけ結りんこそいとくる人あれ
細 此云やくそ うらもそらまづけていきるくこ衲まのと、
世まおるれまひねわれば、人うるんとの結
叢の里之 わそ、いしとりき流んるすれば、施しもけり

ゆうさ行うし花ふ文献法
人のとをきくしこを叢
のうでまりよるくえまり
下へうりのんとのべ結之

中堂ニハ孟つるよ山々のあれ
そ結ちりあるまだいその
かくまてし紫りしるとし
きるならでいわるしあぐ
くさかいつそまじれくし
所根本中堂延暦七年
傳教大師建立之本尊
薬師如来ハ大師造立之

世のくらけのくらうのかまし
世ぐくりわくも人の世そけいしきんことと、
浮舟の之 めうさを結りくみとも紫がるしらん山里ハ
いづてまうわんいきおして夜あしうるとど
我まさ人結紹よわひてきそいふさうるつ
るさ雨もさくわろをおもしくて、とをら
くもとふへがめれあやくしこのこしと地さく
西 毎月八日ハ六斎日の結之も上薬師の縁日なり
わし紫がを月いその八日ハ施さうらるさまさま
寄進ニ及ぶさしやうわうとま
さをさせかの人ハ薬師にまし尤なりれを
まそみてくへ
てるしまへるうちうま中堂ま時く来結
ちうぐう
なりそれきりやがく横川よ出し来へと云え
三 浮舟の母のことなり
しうく、彼をく人とのもとうハあて詣りまて、そ
時宜ニまかせてへりくなへく
人くよいくうまさつうそじ、まで結ままでそさ

其以後梵天帝釈四天王忠仁公日光月光菩薩守治開白十二神将御堂開白

ねがふとのかくへ 細 ひらのちれまし 愚按 おこわ ハ中にほけなると云く

被レ追二衛之一ヲ

つくあすきんとあわしを助くまのせくとこ

うちきん義 細 先打見 がく人も助けたとしおうこし義のむくらかも叙

ん方も哀をまさこき まきらくんもやまたけんざまうくまその

さまうにひつうるを 人とはくうけるがくわやしるさ間よう

奥して行多くおわり 尼をとえ うちこしふう人の中ゆくうきこま々つけ

りんと後なるえし まんこそいきじう安くきれししまるけり

さするまそ人へこし

細 自然おもしげなる人

よ奥してあうてへとこ

三 葉の心 ちら 何の故何と孟 葉の石をうくそれく

石まふくら 石をうまゆがしくるうしきるとや

中堂の石をうくこし